



世俗社会における 聖 音 楽

「あらゆる良い贈り物、
あらゆる完全な賜物は、
上から、光の父から下って来る。
父には、変化とか回転の影とかいうものはない。」

ヤコブ1章17節

香港アドベンチスト・カレッジ
ルディ・ルイズ教授

世俗社会における
聖 音 楽

Sacred Music

In a Secular World

愛する主にある同信の兄弟姉妹方

人間は嬉しい時に歌を歌いますが、しかし、不思議なことに悲しい時、淋しい時にも歌います。

歌は心の琴線にふれた感情の発露です。ですから、心は歌を選び、歌は心に影響を及ぼします。歌は、人間にとって、とても大切なものなのです。

イエス様のことについて証の書は次のようにしるしています：

「たびたびイエスは詩篇や天の歌を歌って心のよろこびを表明された。ナザレの住民たちはイエスが神への賛美と感謝をささげられる声をたびたび聞いた。イエスは歌を通して天とまじわられた。仲間の者たちは、働きに疲れて不平を言うと、イエスの口から出る美しい歌の調べに元気づけられるのだった。イエスの賛美は悪天使を追い払い、香煙のようにその場をかおりで満たすように思われた。きいている者たちの心は、この地上の放浪から天の家郷へとはこばれて行った。」（各時代の希望上 67）

イエス様を包んでいたこの歌のしらべこそは、ストレスのふえた今日の私たちにも必要なものではないでしょうか。

そのようなことを思いめぐらしていた時に、私たちはこの小冊子に出会ったのでした。南十字星の輝くジャワ島で開催された極東支部国際青年大会において、多感な青年たちの前に提示されたこの音楽に関する高潔なメッセージは、いよいよ混迷を深める今日の私たちへのメッセージだと確信いたしました。

そこで、天沼教会名誉長老であった故・三村朗氏が生前、SDAの音楽高揚のためにと用意された資金をもって、この小冊子を愛する同信の兄弟姉妹方に贈呈することを願い、SDA教団に配布の承認をお願いし、ご了解をいただき実現の運びにいたったことは神様の御導きによるものと喜んでおります。願わくは、この小冊子が一人でも多くの兄弟姉妹方の手にとどき、信仰の歩みの道しるべとなり、祝福となりますように祈りつつ贈呈させていただきます。

音楽家有志一同

小川 とき

佐藤 かほる

三村 園子

三村 範基

湯川 晴美

(アイウエオ順)

目 次

第1章 大争闘における音楽の役割.....	3
A. 大争闘は如何にして始まったか？	3
B. 心についての驚くべき事実	6
C. サタンは絶えず人間の心に攻撃を仕掛ける	8
D. 心に関する科学的発見.....	10
E. 人の行為に作用する音楽の役割	10
F. アドベンチストの若者がサタンの特別な攻撃目標	12
第2章 残りの教会 VS 世俗的妥協	14
A. 残りの教会：その緊急使命	14
B. 最も浸透している霊的な敵	15
C. 墮落した文化における教会音楽	17
D. 世との音楽的妥協.....	20
E. 世に対する教会の証	21
F. 最後の危機への備え	24
G. 伝道の最終任務.....	27
第3章 残りの民とエキュメニカル伝道 2000	32
A. アドベンチストのジレンマ：福音をまだ聞かない人達にどう 伝道するか.....	32
B. サタンのグローバル戦略：エキュメニカル伝道 2000.....	33
C. ペンテコステ的心霊術：そのエキュメニズム(教会一致運動) における役割	34
D. 残りの教会とペンテコステ運動	39
E. セレブレーション音楽とエキュメニズム（教会一致運動）	42
F. 神のグローバル戦略はエキュメニズム（教会一致運動）では ない.....	44
G. 大いなる叫び：神の最後の伝道プログラム.....	46
第4章 キリスト再臨前のアドベンチスト音楽.....	48

A. 今の時代を知る.....	48
B. 神の民を欺くサタンの音楽	49
C. その1－シナイ山麓での音楽の背教.....	50
D. その2－ヨルダン川東岸での音楽の背教.....	51
E. その3－1844年直後の音楽の背教.....	52
F. その4－1900年の音楽の背教.....	53
G. その5－恩恵期間終了直前の音楽の背教.....	55

(編集者の追加付録)

歌唱に関する証の書からの引用文	58
-----------------------	----

第1章 大争闘における音楽の役割

A. 大争闘は如何にして始まったか？

神は私たちに美しい歌を与えたいとお望みになり、音楽をお造りになった。「この世の始めに、神はすべての創造のみわざのうちにご自分をあらわされた。・・・地を美しさでみだし、空中を歌でみだされたのはキリストであった」(希望上2)。神はご自分がお造りになった者が、彼を礼拝することを望んでおられる。これには天における礼拝の一部を形作る音楽が用いられる (EV507 参照)。礼拝と神事の務めが、音楽の主な目的である。音楽の奉仕は神によって計画され(歴代上 28:19 参照)、神によって命じられ (歴代下 29:25 参照)、神によって祝福された (歴代下 5:13 参照)。

創造のみわざに携わっておられる間、神は天の聖歌隊を用いられ、バックコーラスを奏でさせられた。美しい言葉で、神は「わたしが地の基をすえた時、どこにいたか。・・・かの時には明けの星は相共に歌い、神の子たちはみな喜び呼ばわった」(ヨブ 38:4,7) と言われた。想像を絶する聖歌隊であったことだろう。

天の聖歌隊の指揮者—ルシファー—

彼は美しく、完全な聖天使で、神は特別な栄誉を授けようと彼をお造りになった (エゼキエル 28:12-15 参照)。彼はキリストの次に栄誉を受ける、非常に身分の高い天使であった。息をのむほどの音楽を描写して、主のしもべは次のように述べている：



「私は天の美しさを目の当たりにした。私は天使たちの歓喜の歌声を聞いた」(1T123)。

「ルシファーが天の聖歌隊を指揮していた。彼がタクトを振り始めると、天の全軍が彼と共に相和した。すると壮大な音楽が

神と御子の誉れを称えて全天にこだました」(SR25)。

ルシファーが天の音楽を取り仕切る長であった。彼が第一指揮者であり、最初の作曲者、そして音楽を用いた天国の礼拝の最高指導者であった。

しかし、神もルシファーもある共通のものを求めた。神は私たちの礼拝をお望みになる。それは神が私たちが造り変えたいと望まれるからである。ルシファーも私たちの礼拝を望んでいる。それは彼が私たちが滅ぼしたいと望んでいるからである。彼の悪魔的な目的を容易に達成するには、礼拝が一番の近道であることを彼は発見した。真の礼拝に戦いがつきまとうのはそのためである。私たちが神を礼拝するためにひれ伏すとき、敵は私たちに戦いを挑むのである。

礼拝の対象となりたいというルシファーの願望は、天に反逆をもたらした。天国の歴史で、最も悲劇的な瞬間であった。キリストとその天使たちに対抗するルシファーとその部下たちの戦いが起こった(黙示録 12:7 参照)。ルシファーは神の御子に嫉妬していた。彼は神の高みを極めたいという野望を抱いた(エゼキエル 28:17 参照)。彼の願望は崇拜されることであり(イザヤ 14:12-14)、神と等しくなりたいという彼の誇りと野心が天の政府とキリストの権威に対して謀反を起こさせた。彼の巧みな説得のために、天の聖歌隊員の3分の1が、指揮者の側についた。彼らが天を混乱させるのをこれ以上許すことができない状態にまでなったとき、神は彼らを天国から追放された。

「龍もその使いたちも応戦したが、勝てなかった。そして、もはや天には彼らのおる所がなくなった。この巨大な龍、すなわち、悪魔とか、サタンとか呼ばれ、全世界を惑わす年を経たへびは、地に投げ落とされ、その使いたちも、もろともに投げ落とされた」(黙示録 12:7-9; SR28)。サタンの追放について、キリストは「私はサタンが電光のように天から落ちるのを見た」(ルカ 10:18)と言われた。

私たちが住んでいる地球は、かつて宇宙で起こった戦いの中で最も激しい戦いが繰り返されている戦場であると、聖書は教えている。聖書に書かれている他のすべての教えを私たちが理解できるのは、この大争

闘の観点から見るときだけである。このサタンとキリストの勢力間で交わされている大争闘の性質と起源、目的そして結果を理解しなければ、人生の答えを満足に見つけることはできない。しかし、私たちが日々直面するこの霊的戦いの現実と、勝利の確かさは、決して否定されることのできない有力な事実である。

なぜ私たちはこの戦いについて知る必要があるのか？

地上の歴史はすなわち、神とサタンとの戦いの歴史でもある。ごく少数のセブンスデー・アドベンチストだけが、この厳粛ですばらしい真理の広大な意味を把握することができるのである。神の民として、私たちが大争闘のこの概念を理解するのは極めて重要である。

私たちはサタンの力と影響力について、あまり語らないよう注意されている。しかし、私たちがサタンにほとんど敵対心を抱かない理由の一つは、彼が最も憎んでいる教会、すなわち残りの教会であるセブンスデー・アドベンチスト（黙示録 12:17）に対する彼の特別な攻撃について、私たちが恐ろしいほど無知なためである。

私たちは残りの教会、すなわち敵の憎しみの対象であるので、敵とその計画や方法をできるだけ知ろうと駆り立てられるのである。サタンの戦術を学ぶのを怠ることによって、彼にほとんど「想像もつかないほど優位」（大争闘下 258）な立場を与えることになるのである。もし私たちが攻撃法をよりよく理解するならば、彼は私たちに対して優位な立場を占めることはできない（1T308）。この戦いについて知る必要がある理由は三つある。

①SDA 神学の中心

他のいかなる単一の教理よりも、また他の多くの意味合いも含み、大争闘の真理はセブンスデー・アドベンチスト信条の背景を形作っている。安息日、死者の状態、聖所、再臨といった「信仰の柱」を形作る聖書の真理は、すべて大争闘と切り離して考えることができない。それは今も続いていて、私たちは各々深く、個人的に関わっているのである（2S M388,389 参照）。

②教会の特殊な使命にとって必要不可欠

全世界に伝道するために、アドベンチストの証人を滅ぼそうとする敵の戦略について前もって警告することが極めて重要となる。

③私たちの救いに不可欠

サタンの方法や策略について知っていることは、勝利を収めるのに極めて重要である。私たちの周囲には、至るところで死の罠が仕掛けられている。それらについて無知であることは、霊的敗北と永遠の損失を招くことである。サタンは自分が軽視されることを喜ぶ（1T342）。なぜならサタンの大いなる成功は、私たちの心を混乱させて、彼の策略について無知なままにしておくことにかかっているからである（3SM424）。神の民は知識がないために滅ぼされると聖書は警告している（ホセア 4:6）。

B. 心についての驚くべき事実

大争闘の本当の論点は何であろうか？

他のいかなる戦いよりも深刻なこの大争闘における本当の論点は、これが人の心（マインド）をめぐる戦いであるということである。言い換えれば、大欺瞞者は私たちの心の支配権を得ようと決意しているのである。この戦いは、単なる八百長試合ではない。聖書は「神はわたしたち使徒を・・・天使にも人々にも見せ物にされたのだ」（I コリント 4:9）と述べている。

戦いは続いている。それは終わらねばならない。使徒ペテロは「・・・あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししのように、食い尽くすべきものを求めて歩き回っている」（I ペテロ 5:8）と述べている。今日の音楽が人の心に及ぼす致命的な影響について、もとロックミュージシャンであるボブ・ラーソン氏は次のように述べている。

「人の魂をめぐる戦いは、心の中で繰り広げられているのである」（音楽が死んだ日 113 ページ）。

ある極めて重大な科学的発見は、心はその人全体をつかさどるという

ことである。心はすべての行為を支配（コントロール）する。朝起きてから夜寝るまでの一瞬一瞬、人は何らかの行動につながる決断をしている。各決断は心でなされる。心が体全体を支配しているのである。

心について聖書は何と言っているか？箴言 23:7 は、「人が心に思い図ることが、その人となりである」（欽定訳）と言っている。ルカ 6:45 によると「善人は良い心の倉から良い物を取り出す」ということである。つまり、心は私たちの振る舞いのすべてを支配するのである。主のしもべは、「心はその人全体を支配する。私たちのすべての行為は、善し悪しに関わらず心に源を置く」（FE456）と述べている。

「神を礼拝するのは心である」（FE456）。神を礼拝するのが心であるとすれば、真の礼拝が行われるには、心が全く神に屈服していなければならないということである。神は生涯の全的献身をお求めになる。「あなたは心をつくし、精神をつくし、力をつくして、あなたの神、主を愛さなければならない」（申命記 6:5）。それは私たちの持てるものすべてをもって、全存在をかけて神を愛するという意味である。

意志をすべて神に屈服させるのは容易でないと、多くの人たちは言う。確かにその通りである。心を神に全く屈服させるのは、最も困難なことであると、エレン・ホワイトは述べている。なぜなら、全的献身は非常に多くの犠牲を要求するからである。日々新しくされたキリストとの全き結合を要求するのである。私たちの心にキリストの霊が永久的に宿ることを要求するのである。私たちの思想、会話、感情、振る舞いを改めるということである。完全な屈服とは、全思考を神の律法に服従させることである。

全き献身は生活の改革を意味する。フェルナンド・チャイ氏はその著書「勝利への鍵」40 ページの中で、そのような献身は「私たちの服装、食事、社交関係、聴く音楽、読書、私たちが参加する行事、ラジオやテレビの用いかに自ずと現れ出てくる。この種の献身は、私たちの家庭、教会、そして仕事場における生活を変革させるであろう。民として私たちが掲げる原則は、もう一度擁護し、遂行しなければならないものである」と述べている。

このような献身は、要求が厳しすぎると、我が民の大部分は考える。私たちが今でもまだこの地上にいる理由はそれである。民として、私たちは印される用意ができていない。私たちは後の雨を受ける用意も、大いなる叫びを発する用意もできていないのである。私たちは、天に移される用意ができていない。主をお迎えする用意もできていない。悲しいことではあるが、これが現実である。

心がすべての行為を支配することを踏まえて、次のメッセージに耳を傾けていただきたい：

「全組織と連絡している脳神経は、天が人と通信することのできる唯一の媒体であり、人の内なる生命に影響を与えるものである」(2T347)。

心について注目すべきことが三点ある。それらを見損なうと、その結果は致命的である。

- 1) 心が私たちのすべての行為を支配する。
- 2) 神を礼拝するのは心である。
- 3) 心は、神が人と通信する唯一の媒体である。

これらのことは、私たちに何を語っているだろうか。もし心が私たちの全行為をコントロールするとしたら、心が神を礼拝するのだとしたら、心が神と交わることのできる唯一の手段であるとしたら、サタンが最初にこの伝達器官(コミュニケーション・システム)を破壊しようとして攻撃の矛先を向けるのは、極めて当然のことであると言える。

C. サタンは絶えず人間の心に攻撃を仕掛ける

サタンの攻撃法とは？

その事について、靈感の書は次のように述べている：

「サタンは何千年もの間、人間の心の特性を研究してきたので、今では人の心を非常に知り尽くしている。巧妙な働きかけによって、彼は人の心(マインド)を自分自身につなぎとめている」(2SM352)。

サタンがこの研究課題をどのようにして極めたかは、驚嘆に値する。何千年もの間、大欺瞞者は催眠術とマインドコントロールを専門的に研究し、研究に研究を重ねた結果、今ではその達人となっている。そして彼の最終目的は何であろうか？人の心を自分自身につなぎとめることである。彼はどうやって人間を捕らえるのだろうか？

次に挙げる靈感の言葉は、更に衝撃的である：

「サタンは人間の心を扱うのに用いる材料を熟知している。彼は数千年にわたり、うむことなく研究してきたので、あらゆる人間を最も容易に攻撃することのできる点を知っている」（あけぼの下 71）。

つまり敵は、人と神との通信を断ち切るために用いるべき道具、武器、また手段を正確に知り尽くしているということである。私たちの崇拝を受け、コントロールするために彼が第一に攻撃する標的は、心なのである。

唯一の安全は神に支配（コントロール）していただくことである。「絶えず祈りなさい（I テサロニケ 5:17）との勧めは理にかなっていて、この最終時代にぴったり当てはまる。人の心をめぐるこの戦いは、これまで以上に激しいものとなっている。

「今日サタンの力は、彼が天で反逆した頃と比べると、百倍も強力になっている」（3T328）と警告されている。

時の終わりに近づくにつれ、敵は人の心を捕らえるために、何千何万という罠を張り巡らしている。誰の心のことだろうか？当然、残りの教会に属する人たちの心である（黙示録 12:17 参照）。

なぜ、サタンはアドベンチストを特に狙うのか？

理由はごく簡単である。彼が私たちを憎むのは、このセブンスデー・アドベンチスト教会から、四方の風が解き放たれる前にふるわれて印される、生ける純潔な民の一団が現れるからである。彼らが印されるとき、彼らの声に「第三天使の大いなる叫び」が加えられ、伝道の働きを完了させるために、メッセージが「全地を照」らすであろう。その結果、数

えきれないほどの群集がセブンスデー・アドベンチスト教会に加わるのである。彼らは印され、生きて天に移される。

SDA 教会からこの奇跡的一団が現れるのを知っているのです、その昔、天において傷つけられた神の品性を擁護するため神によって用いられる選民に対して、サタンは特に激しい攻撃を仕掛けるのである。それから神は彼らを用いて、大いなる叫びの期間に地上の最後の収穫を集めさせられるのである。それ故サタンは、神の選民の心（マインド）を支配（コントロール）しようと心に決めているのである。

D. 心に関する科学的発見

ある時、ロシアの科学者であるイワン・ペトロヴィッチ・パブロフは、犬と鈴と食べ物を使って、人の心は操作され得ることを証明する実験を行った。今日の世界は、次の痛々しい真実を認知している。

- 1) 人の心は条件づけられ、操作され得る。
- 2) 人の心はへし曲げられて破壊され得る。
- 3) 心の防御態勢は弱められて撃破され得る。
- 4) 人の威厳は卑しめられ、ずたずたにされ得る。
- 5) 人の行動は動物のレベルにまで引き下げることができる。

更に多くの巧妙な欺瞞的働きかけを通して、マインドコントロールは至るところで繰り広げられている。サタンは、マインドコントロールに用いられる数多くの罠を用意してきた。下に、サタンがマインドコントロールに用いる道具の一部を挙げる。どれも無害で魅力的に思われるが、その結果は致命的となり得る。どれも心（マインド）を支配（コントロール）するために考案されたものばかりである。

(ヘビーメタル、ロック、ジャズ、ディスコ、ラップ)ミュージック
オペラ 心霊術 催眠術 占星術 カードゲーム タロット・カード
新聞 雑誌 小説 ポルノ 広告 テレビ ラジオ アルコール
たばこ 麻薬 スポーツ 演劇 テレビゲーム

E. 人の行為に作用する音楽の役割

音楽はマインドコントロールとどのような関わりがあるのだろうか。音

楽に関する近年の極めて参考になる科学的発見は、ショーン博士の著書「音楽の心理学」の中に最も良く提示されている。彼は「人間の心に影響を及ぼす知覚プロセス（過程）の中で、音楽は最も強力な刺激物である」と断言する。ほとんどのポップス音楽に共通する反復リズムは、催眠効果を持つという調査発表がなされた。

もう一つの重大な科学的発見は、音楽は（視床を通じて）人間の潜在意識に直接入り込み、（音楽を知覚するのに）理性や判断力を用いることはない（皮質を迂回する）ということである。サタンはこの事実を知っていて、人の心に潜入するのに音楽というくさびを打ち込むことによって、たやすく優位な立場を得たのであった。エレン・ホワイトは次のように述べている：

「もしサタンが・・・心に接近する手段として音楽を利用することができるならば、彼は音楽に何ら反対しない」（1T506）。

まさしくサタンは、彼の音楽を通して、まんまと私たちの心に侵入したのである。

何年も前に靈感の書は教会に警告していた。サタンの目的は、人の心を自分自身につなぎとめておくことである。天国におけるかつての音楽巨匠は、彼自身の音楽を作った。それは主にアドベンチストの民の心を、自分自身につなぎとめるためにもくろまれた。今日、音楽と人間の行為は密接に関係しているという証拠が次から次へと発表されている。

米国において、ジャズとロック音楽の最高権威者の一人であるデビッド・ベイカーズビル博士は、「西洋史の中で、音楽と人間の心がこれほど密接な関わり合いを持ったことはかつてなかった」と断言する。

改心したもとロック・ミュージシャンで、ロック音楽に反する7冊の本を著したボブ・ラーソン氏は、「人の魂をめぐる戦いは、心の中で繰り広げられているのである。サタンは、心の視聴覚を心理的に急襲することの重要性を認識している」（音楽が死んだ日 113 ページ）と述べている。これらの声明は私たちが身震いさせるとはいえ、民をカブけるものとなる。今日の科学的調査は、音楽に関してホワイト夫人が書いた事

柄をますますはっきりと裏付けている。

F. アドベンチストの若者がサタンの特別な攻撃目標

人間の心を自分自身につなぎとめておこうというサタンの計画の中で、音楽はどのような役割を果たすのだろうか。この世の神であるルシファーは、かつて天においては音楽の巨匠であったことを覚えてほしい。罪を犯す以前、彼は聖歌隊の指揮者であり、今でも私たちの誰よりも音楽について熟知している。はるかエデンの園の時代から、サタンはその目的を果たすために、人間の音楽を変えようと決意していたと、靈感の書は述べている（生き残る人々36-44 参照）。

神とサタンは、人の生活に音楽を吹き込むのに、それぞれ正反対の目的を持っている。ハワード・ハンソン博士によると、「音楽は善をなすのと同様、悪をなす力もある」（米国心理学ジャーナル）。音楽は大きな祝福となり得るし、恐ろしい呪いともなり得る」（1T497）。

リズムは最も強力な肉体的反応を誘発する。サタンはしばしば、肉体の反応に訴えることによって大成功を収めていることをエレン・ホワイトは何年も前に示した。アドベンチストの若者をこの点から攻撃してくる危険を鋭く認識して、主のしもべは「彼らは音楽に対する鋭い耳を持っており、サタンは、心を興奮させ、動かし、夢中にさせ、魅惑するために、どの器官を刺激したら良いかをよく知っている」（1T497）と述べている。世俗音楽は：

- 1) 人間の下等な性質を墮落させる（4T653 参照）。
- 2) 神の民を罠に陥れる。
- 3) 教会を誘惑し罠にかける。
- 4) 世俗を愛するように教会員をそそのかす（CT341-345 参照）。
- 5) 悪の目的を果たすため、サタンによって巧妙に計画されたものである。

アドベンチストの若者が特別な攻撃目標になっていることは、上で言及したばかりであるが、最近の科学的研究は、ロックとジャズそしてその混合は、若者を直接射止めるために作られた最初の音楽であることを

明示している。悪魔の最終ゴールは、アドベンチストの若者を自らの隊列に加えることである。宗教歌とサタンの音楽を混ぜ合わせるという傑作を通して、敵はアドベンチストの若者の心を自分自身につなぎとめることに成功している。サタンは今日、神の若い子供たちの心に潜入している。サタンの音楽に欺かれ、SDA 教会は滅びの備えをしているのである。最終時代にアドベンチストの若者を待ち伏せている驚くべき危険について、主のしもべはこう述べている：

「この時代のほとんどの若者が永遠の生命を逸することを考えると、私は耐え難い気持ちになる。ああ、あの楽器の音が止んで尊い時間を自分たちの好き勝手な楽しみにこれ以上費やさないことを願うものである」(2T144)。

ほとんどのアドベンチスト青年は、サタンが教会に宛てて書いた音楽を用いたために天国を逃すであろう。私たちの唯一の安全は、一瞬一瞬、主イエスに心をささげることである。



第2章 残りの教会 VS 世俗的妥協

A. 残りの教会：その緊急使命

「しかし、地と海よ、おまえたちはわざわいである。悪魔が、自分の時が短いを知り、激しい怒りをもって、おまえたちのところに下ってきたからである」(黙示録 12:12)。同じような警告が、主の使命者によってセブンスデー・アドベンチスト教会に与えられている。

「危険な時が私たちの目の前に迫っている。・・・敵は私たちの跡を追っている。私たちはしっかり目を覚まし、警戒しなければならない。・・・与えられている警告に注意しなければならない。もしそれを無視(軽視)すれば、私たちは何と申し開きをすればよいだろうか」(8T298)。

この短いセミナーで、あなたを身震いさせるかもしれないようなものを聞いたり見たりするであろう。私たちの目的は救い主と彼の真理を掲げ、それによって、この最終世代における神の民を力づけることである。これから述べることにに関して、悪魔に謝罪するつもりはない。なぜなら、サタンが神の残りの民に知られることを一番恐れている策略を暴露するからである。

「この大欺瞞者が最も恐れていることは、われわれが彼の策略を見破ることである」(大争闘下 258)。

私たちが戦っているこの最も激しい戦いにおいて、サタンが神の尊い SDA 教会に挑んでくる最後の攻撃を目撃するとき、私たちは前もって警告され、励まされる必要がある。そのようなことは起こらないと思う人には、黙示録 12:17 を読んでいただきたい。

「龍は、女に対して怒りを発し、女の残りの子ら、すなわち、神の戒めを守り、イエスのあかしを持っている者たちに対して、戦いをいどむ

ために、出て行った。」黙示録 20:2 を見ると、この龍が悪魔であることが分かる。彼は、神の戒めを守り、イエスのあかしを持っている世界でたった一つの教会に戦いを挑んでくるのである。

黙示録 19:10 では「イエスのあかしは、すなわち預言の霊である」と述べられている。SDA 教会は聖書の預言に記されている残りの教会である。そして、最終的、また誇りある任命として、大いなる叫びの時に大勢の人々をバビロンから呼び出して、神の群れに加えるという大仕事を授かっているこの運動に参加させてもらえることを光栄に思っている (CT532 ; 黙示録 7:9 参照)。そういうわけで、この教会の一員となるすべての者は、教会の理想と目標に一致することが要求されているのである。彼らの生活は、彼らが掲げている使命の如く独特なものでなければならない。ここで、悪魔は何故これほど SDA 教会を嫌い、攻撃の矛先を向けてくるのかが理解できるであろう。

B. 最も浸透している霊的な敵

敵は教会の文化を通して、教会を最も激しく攻撃する。数多くの国に設立されている SDA 教会は様々な文化によって構成されている (ローマ 14:4,5 ; I コリント 12:13 参照)。ウェブスター辞典によると、文化は人種、宗教、また社会的グループの習慣的信条、社会的形式や物質的特徴で構成されていると、定義づけられている。しかし、聖書はすべての文化が墮落したことを物語っている。

使徒パウロは、「すなわち、すべての人は罪を犯したため、神の栄光を受けられなくなっており、・・・」と述べている (ローマ 3:23)。イザヤは「われわれはみな、汚れた人のようになり、・・・」と述べている (イザヤ 64:6)。賢者は「善を行い、罪を犯さない正しい人は世にいない」と書き残している (伝道の書 7:20)。神は、すべての文化は墮落したと宣言しておられる。言い換えれば、何らかの形で各国の習わしや習慣は退化したのである。ジョン・ブランカード氏の著書「ポップスが福音世界に行く」の中で、彼は次のように述べている：

「すべての文化には、その価値観の根底に流れているある原則

が見られる。それは、どの時代においても、すべての国とその文化の至るところで表面化している墮落である。・・・」

筆者は、この墮落は現在なお続いている現実として認めていながら、それぞれの文化は独特の美しい、力強い、人を高める特質を持っていることを説明している。

ここで浮かび上がるのは、「アドベンチストとして自分の文化の長所と短所をどう調和させればいいのか？」という質問である。1972年7月21日の安息日学校教課に「福音と文化」という題で次のことが書かれていた：

「すべての文化は、福音の要求を強め、クリスチャンとして生活する人々の手助けをする要素を持っている。しかしすべての文化には、福音と神の国の原則に相反する要素も含まれている。このような要素は切り捨てて、克服されねばならない。教会は一つではなく、多数の文化を持っている。しかし、そこにはそれぞれの長所と短所がある。それぞれ罪と悪に満ちており、修正の必要を持っている。キリストはすべての文化を超越しているが、すべての文化の内におられると同時に、すべての文化に敵対している、とも言えるのではないだろうか。」

「わたしの味方でない者は、わたしに反対するものである（マタイ 12:30）。

一世紀以上もの間、SDA 教会は、教会員のライフスタイルに極めて有害な影響、習慣や思想があることを警告されていた。これらは「世」と呼ばれている。使徒パウロ、ヤコブとヨハネは皆声をそろえて、「**世を愛してはならない**。あなたがたは世のものではない。世から出て、特別な区別された民となりなさい」と切迫した熱心さで訴えているのである。「あなたがたはこの世のものではない。かえって、わたしがあなたがたをこの世からえらびだしたのである」とキリストは言われる（ヨハネ 15:19）。

パウロは「この世と妥協してはならない。むしろ、心を新たにすること

とによって、造りかえられ、何が神の御旨であるか、何が善であって、神に喜ばれ、かつ全きことであるかを、わきまえ知るべきである」と書き記している（ローマ 12:2）。

次に挙がる質問は「神はなぜ、ご自分の民を世と区別なさりたいのだろうか？」といったものである。理由は、この二つは相容れないからである。神がサタンと相容れないのと同様、神に従う者はサタンに従う者と一致してもらいたくないのである。もし一つになれば、悪と一つになっていることとなり、神の友ではなく、敵に回ることになるのである。「世の友となろうと思う者は、自らを神の敵とするのである」（ヤコブ 4:4）。

C. 墮落した文化における教会音楽

急激に変化していく社会においては、福音を現在の文化に合わせるべきだろうか。私たちは、現代の流行に応じて教会の標準を合わせるべき（現代化すべき）なのだろうか。結局時代と価値観は既に変わっているのだから、アドベンチズムを今の文化に合わせることはできないだろうか。この論理によれば、神が皆に受け入れられるためには必ず変わらねばならないのである。「だから私たちの高い標準、単なる人間の標準ではなく神の標準を捨てよう。ロック音楽、世の快樂、世俗の劇や映画、また幾千という世の中のを教会に持ち込もう。これはすべて教会を文化に合わせるためだ」ということになってしまうのである。

私たちが神の方法を変えるべきであらうか。断じてそうではない！神は、人間のゆがんだ道に合わせるために自らを変えることは決してなさない。なぜなら、墮落したのは私たちの方であって、私たちが神に合わせるべきなのである。初代教会が福音宣伝という任命に失敗したのは、妥協というサタンの昔ながらの手段が原因であった。この思想は、初代教会が背教した教会へ転じていった 2 世紀から 3 世紀に入り込んだものであった。

教会は、どのようにして福音の単純さから離れていったのであろうか？異教徒から容易に受け入れられるために、キリスト教が異教のなら

わしを取り入れたのであった。改宗者を確保するために、キリスト教信仰の高い標準が下げられた。その結果、異教が洪水のように教会に流れ込み、それと共に異教の習慣、偶像までもが入り込んだのであった。

伝道を容易にし、教会員をもっと増やすために、キリスト教の高い標準が犠牲となり、教会を世に近づけることとなった。悪魔は初めから、神の民を負かすために用いるべき武器を正確に把握しているのである。神の残りの教会を負かすには、世との妥協が最も効果的な武器となることを、サタンは初めから知っていたのである。

サタンが教会を世俗の洪水で攻撃する動機は？

龍が教会を世俗の洪水で押し流そうとする第一の目的は、できれば教会の破滅を確実なものにするためである。主のしもべはこう述べている：

「主が真に改心した者を教会へ導かれる間は、サタンもその交わりにふさわしくなるように改心していない者を教会へ連れてくる。キリストが良い種をまいておられる間、サタンは毒麦をまいている。教会員の間では、二つの相反する影響力が絶えず及んでいる。一つは教会の浄化のために作用し、もう一つは神の民を墮落させようと働きかけている」(TM46)。

最後の時代に生存する真の教会として、私たちはこの世と妥協することのないよう勧告されている(ローマ 12:1,2 参照)。「教訓と模範によって、私たちはサタンの偽の標準にまさる完全な標準をしっかりとつかんでいなければならない」(7T137)。「不信者と、つり合わないくびきを共にするな。義と不義となんの係わりがあるか。光とやみとなんの係わりがあるか。キリストとベリアルとなんの調和があるか。信仰と不信仰となんの関係があるか」(II コリント 6:14,15)。急速に墮落していく社会で、我々の安全はどこにあるだろうか？

「私たちの唯一の安全は、神の特殊な民として立つことである。私たちはこの墮落した時代の習わしや流行に少しも譲歩してはならず、世の腐敗した偶像礼拝の習慣に妥協しない道徳的独

立心を持って立たねばならない」(5T78)。

音楽は文化の重要な側面である。サタンは初めから、人間の音楽を自らの目的にかなうように変えてしまおうと考えていた。魂を畏に陥れ、心を真理からそらせ、悪の目的を果たし、そして神の民に世を愛する心を抱かせるために、サタンは音楽を用いるであろう。しかし「神聖な目的のために仕え、純潔で気高い思想へと引き上げ、魂の内に献身と感謝の念を目覚めさせるために」、神は音楽をお作りになられた (FE97, 98)。従って、私たちの礼拝を望んでいる神とサタンは、音楽に全く正反対の目的を託したと言える。

神が定められた音楽の標準をすべての文化に適応させることは可能か？音楽の各グループはそのスタイルや習慣を深く理解することなくして、部外者がそれを判断することはできないというのが、文化的相関性についての人類学者の概念であると言われている。この人間的な概念は、神が定められた音楽の標準をすべての文化群に適応させるのを、困難なものにしてしまう。

だが、正直で真に改心したアドベンチストに選択の余地はない。キリストが生活の中心となった、残りの教会に属するすべての個人個人によって適応されねばならない世界共通の標準がある。真のセブンスデー・アドベンチストは、この標準に従って、自らの生活圏内で神とサタンの音楽を選り分けるのである。このようなクリスチャンは、「・・・うちにある望みについて説明を求める人には、いつでも弁明のできる用意」ができていたのである (I ペテロ 3:15)。

SDA 音楽観の指針は、「様々な文化、民族群において人の霊性を高め、宗教的になかったものが多くある。但し、すべての人の音楽的好みや習慣は、キリストのような品性という世界共通の価値観と合致すべきであり、すべての人は、画一性よりもむしろ調和を求める福音の精神と目的の内にある一致のために努力すべきである。音楽における世的な価値観 (ロックやジャズまたそれらが混ぜ合わされた形のような)、つまりクリスチャンの高い理想を表現することのできないものは避けるよう、注意が必要である」と述べている。

ユース・フォー・クライストの創設者であるテリー・ジョンソン氏は、「**教会音楽の墮落（腐敗）は悪である**」と断言する。「**暴露されたサタンの音楽**」の著者であるローウェル・ハート氏は、次のように書いている：

「その人の音楽の選択は、ジェネレーション・ギャップ（世代間の隔たり）や、個人的好みの問題ではない。世俗音楽のこのゆがめられた福音は、サタンの恐ろしい欺瞞である。これは私たちが立っている堅固な岩を侵食しようという試みに他ならない」。

エレン・ホワイトはこう述べている：

「それがどこで行われようが、罪は罪である。そして神がお入りになられる前に、罪が取り去られていなければならない」（GCB1893年 188 ページ）。

特殊な聖い民であるべき神の選民にとって、文化や国民性は音楽と関係ない。あなたが黒人、白人、黄色人種、あるいは赤や茶色であろうと、罪は罪なのである。ある人種にとって悪魔の音楽であるならば、それは他の人種にとっても悪魔の音楽なのである。

D. 世との音楽的妥協

世と教会の間で、真のアドベンチストにとって選択肢はたった一つしかない。イエスは「わたしの味方でない者は、わたしに反対するものである」（マタイ 12:30）と言われた。主が私たちに特異であることを要求なさるとき、どうして世の習わしや習慣を追い求めることができるだろうか？「たとえ人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になるのか」（マタイ 16:26）。

私たちの救いは、救い主イエスをとるか、この世の神であるサタンをとるかで決まる。問題は、神の音楽をとるか、サタンの音楽をとるか、である。

アドベンチスト教会の内、ごく一部の人だけが清められて救われるで

あろう。大部分は世との妥協を選ぶため滅びに至る(1T 608,609 参照)。世俗音楽は「最も心をそそられる誘惑の一つ」として定義づけられている。最終時代、サタンの音楽が教会にもたらす「恐ろしい呪い」を感じて(1T497)、エレン・ホワイトは、ほとんどの若者が世的な音楽を選んだために天国を逸することを恐れた(2T144 参照)。ボブ・ラーソン氏は、次のように書いている：

「悪魔は人の注意をイエスの再臨が近いという認識からそらせようと懸命になっている。そしてこの目的を果たすために、サタンは自分自身の音楽を用いてきた」(音楽が死んだ日 205 ページ)。

過去において、指導的立場にあった社会改革者たちは、SDA 教会に魅力を感じた。それは、教会が積極的に文化に立ち向かおうとしていたからであった。今日はどうだろうか？神の民の間には、驚くべき世を愛する心が存在している。多くの者が世と妥協してしまった。日々純粋なアドベンチズムの火がどんどん弱くなっていくにつれて、SDA 価値観のショッキングな衰退という時のしるしを、私たちは目の当たりにしているのである。ちょうど古代イスラエルが荒野をさまよっているとき、エジプトに戻りたいと望んだように、現代イスラエルも、今日同じような道をたどっている。

「キリストに従うと表明する者は、もはや特別にわかたれた民ではない。・・・教会は日ごとに世に転向しつつある」(実物教訓 295)。

E. 世に対する教会の証

キリストを受け入れた後、私たちは新しく生まれ変わった者となる。「だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。古いものは過ぎ去った、見よ、すべてが新しくなったのである」(II コリント 5:17)。神はこう言われる：「あなたがたは、選ばれた種族、祭司の国、聖なる国民、神につける民である。それによって、暗やみから

驚くべきみ光に招き入れて下さったかたのみわざを、あなたがたが語り伝えるためである。あなたがたは、以前は神の民でなかったが、いまは神の民である（I ペテロ 2:9,10）。

改心の後、私たちは皆神の家族の一員となる。私たちは一つの、同じ文化を持つ民として特徴づけられている。神の国の福音や原則と衝突する要素は、放棄しなければならない。今日に至るまで、キリスト教に改宗した異教徒は、彼らが持っていた呪物や家庭で祭っていた神々を直ちに焼き捨てた。これはかつての宗教音楽とのあらゆるつながりを断ち切り、悪魔的祭りや儀式を避けることも含んでいる。

ロック、ジャズ、ディスコ、ヘビーメタル、その他これらを混ぜ合わせた形の世俗音楽は、どれも悪魔からきていることが実証されている。真のセブンスデー・アドベンチスト、またキリストの大使として、すべての教会員は、墮落した世界を神と和解させる使命が託されている。私たちの証は、私たちが担っているメッセージと同じように明瞭でなければならない。

今日 SDA 教会は、世界戦略を妨げるどのようなものに直面しているのだろうか？

それが初代キリスト教会で起こったように、顕著な世俗がアドベンチズムにおける神のみ旨の成就を妨げることがあるだろうか。ロラ・プラマー氏は、その著書「教師の精神」107 ページの中で、次のように書いている：

「私たちはかつてなかったような、新しい時代に直面している。若者たちの心を占めている世の快樂を如何に破壊するかが、この最終時代における究極の問題である。この教会には警告に次ぐ警告が与えられてきたが、世俗は私たちにとってあまりに強力である。最近の統計は、約 71% の青年が毎年教会を去ることを明らかにしている。1988 年 6 月号のアドベンチスト・レビュー誌には、次のような文が載っていた。『教会は青年を失いつつある』と」。

世界伝道プログラムよりも困難なのが、教会員を致命的な危険から救い出すことである。世俗の原則が私たちの心を占領している限り、神は決して世から人々を召し出すという働きを私たちにさせることはできない。家の中が散らかっているときに、人様を招待したいと考えるだろうか。

「教会員が真に改心していないので、今主は決して多くの魂を真理に導くことをなさない」(6T371)。「半端な者は、不信心な者よりたちが悪い。彼らの欺瞞的影響が、多くの者を迷わせるからである」(7BC963)。

今日他教派の人々から、アドベンチストの音楽はもはや独特なものではなくなっているという非難を浴びている。ローウェル・ハート著「暴露されたサタンの音楽」に、次のような驚くべき文が載っている：

「セブンスデー・アドベンチストが経営する〇〇〇は、信者を魅了するために宗教ロックを用いた。」(24 ページ)。

「ついにサタンは音楽という媒体を通して、自分が盲目的かつ熱狂的に歓迎される、大きく開かれた裏口を見つけた」(12 ページ)。

ハート氏のような SDA でない記者が、教会を滅ぼすためサタンによって書かれた音楽の危険について、我が民に警告する本をどんどん出している。

近頃、SDA でない人たちがより良い宗教音楽が聴けることを期待して、SDA ラジオ番組をかけてみると、彼らは何を聴くはめになるだろうか？アドベンチストの宗教ロックかジャズである。「結局、他局と何ら変わらない」。これが彼らの感想である。米国からアドベンチストの音楽グループが極東にやってきたとき、地元のラジオ・テレビ局からこのようなアナウンスが聞こえてきた：「さあ、〇〇〇と一緒に踊ろうぜ！」ある教会員が、最近自分たちが持っている〇〇〇のアルバムを SDA 外の人たちがよく借りに来る、と言っていた。どのような理由で？これら

のテープはダンスホールで使われるのである。また最近、アドベンチストの聖歌隊が〇〇〇の音楽を通して証ししていた間、かなりの数の陸軍将校たちが本部内で文字どおり踊っていたという。

他教派の月刊誌「Christianity Today」1990年2月号に、「アドベンチズムの順応性」という驚くべき記事が掲載されていた。その中で、アドベンチスト教会はペンテコステ派教会の礼拝と音楽スタイルを真似ている、とあった。「ロック」というオーストラリアで出版されている別の雑誌には、1990年5月号の中で、ペンテコステ派のようにふるまっているSDA教会を公然と非難し、「実を結ばないやみのわざに加わらないで、むしろ、それを指摘してやりなさい」という聖句で皮肉を浴びせた。私たちは、無知でも無関心であってはいけない。

「私たちは非難を逃れることはできない。それは必ずやってくる。が、自分たちの罪や愚かさのために非難されることのないように、細心の注意を払わねばならない。非難を受けてもよいのは、キリストのためのみである」(RH1887年3月22日)。

好もうと好むまいと、全世界が私たちに注目している。音楽の正しい用いかたについて、他のどの教派よりも、私たちにはありとあらゆる靈感を受けた勧告や警告が与えられている。私たちが自ら立てている悪い証しを考慮に入れずに、私たちは世界中につまずきの石を置いてしまったのである。まさしくこれは、悪魔が念入りに立てた計略であった。

F. 最後の危機への備え

今日教会が最も必要としているものとは？

ただ教会員数を増やすためだけに、半端な改心者や世俗的な人たちで教会内の席を埋めることで、問題の解決になるだろうか。それとも救い主をますます悲しませるだけだろうか。私たちは悪いことばかりを追い求めてはいないだろうか。ニール・ウィルソン氏が世界総会総理に就任する数ヶ月前、彼は大胆にも世界中の神の民に、リバイバルと改革を嘆願してきた。深い切迫感を込めて、ウィルソン長老は、ミニストリー誌の中に次のような訴えを書いた：

「過去数十年にわたる我が教会の歴史を振り返ってみると、私たちの強調点が間違っていたのかどうか問いたくなる。私たちは、神の働きが地上で完了することを望んでいる。・・・そこでしばしば、必要に答えるものとして、新しいプログラムを導入する。もし教会全体がそのプログラムを後押しして支えることだけでもしてくれれば、福音は世界中に宣べ伝えられ終わりがやってくる、と私たちは宣言する。

・・・ところが私の質問はこうである：私たちには、プログラムを効果的なものにする神の認可が不足しているのではないだろうか。

・・・それでもなお私たちは、人間の能力に頼り、聖霊の役割をないがしろにはしていないだろうか。今はそれが変わるべき時ではないだろうか。

私たちは、神が働きを終えられようとしている時代に生存している。神の民が印される時がまもなく来る。私たちの今の生き方が、神の印を受けるか否かを決定することになる。サタンはすべての障害を取り除いて御霊の注ぎに民が備えるのを最も恐れている。なぜなら、それが私たちに後の雨を受ける備えをさせるからである(セレクトッドメッセージ 1 巻 124 参照)。悪魔が別の新しいペンテコステを起こすことはまずないだろうから、彼は私たちが印されるのを邪魔するために、世的な妥協という戦術を用いなければならない。不純な思いで満たされている心に、後の雨が降ることはあり得ないからである。世に勝つ者は、生ける神の印を受ける特別な民となる。世を愛する思いに勝利しない限り、誰も後の雨を受けることはできない(初代文集 149,150 参照)。

私たちが印を受けるために必要なもう一つの重大要素とは、自分自身の霊的欠乏を認め、民の罪を嘆くことである。もし教会内で行われている罪を嘆き悲しまないならば、私たちは神の印を受けることなく取り残されるであろう(5T211 参照)。印を受けるかどうかは、教会内で黙認されている憎むべきことに対し、私たちが嘆き悲しむかどうかにかか

っている。ここで言う嘆き悲しむとは、神の民を来るべき破滅から救い出すために、率直な警告のメッセージを与えることである（エゼキエル 33:6 参照）。

「主に仕える祭司たちは、廊と祭壇との間で泣いて言え、・・・」（ヨエル 2:17）。今日、神は私たちに「大いに呼ばわって声を惜しむな。あなたの声をラッパのように上げ、わが民にそのとがを告げ、ヤコブの家はその罪を告げ示せ」（イザヤ 58:1）と命じておられる。

神の民が障害を取り除くことによって準備を完結するとき、教会は後の雨によって印され、地上における最大の収穫を得るであろう（TM506; 黙示録 7:1-9,18:1-4 参照）。働きを完成させるために、主は清められた教会を用いなければならぬからである（マタイ 24:14 参照）。「今日、あなたは器をきれいにしていただき、後の雨に備えなければならない」（EV702）。世の低い標準を追い求めることは、すなわち神の力から自らを引き離すことである（神を知るために 305 参照）。世的な妥協は、私たちが大いなる叫びを上げるのを邪魔する。大いなる叫びの働きは、キリストの品性を反映していなければならない。神の僕は次のように述べている：

「キリストの品性が完全にキリストの民の中に再現されたときに、彼らをご自身のところに迎えるために、主はこられるのである」（実物教訓 47）。

私たちの使命を妨げるものとして、世的な妥協に対する警告が与えられている（ローマ 12:2 参照）。神聖な純潔だけが、神の日に立つことができるからである（2T458 参照）。

「全能のお方の力の内にあつて誘惑に耐える者だけが、大いなる叫びを上げることを許されるのである」（RH1908 年 11 月 19 日）。

世界伝道の厳粛で決定的な時に、神に是認された者であることを示すため標準に到達することを、神は教会の指導者と信徒に要求される（2T710 参照）。

「標準を高く高く上げなさいとのお言葉を、主はその民に与えておられる。もし主の声に従うならば、神は私たちの内に働きかけて、私たちの努力は見事に報われるであろう」(6T331)。

G.伝道の最終任務

サタンの力が反逆した当初より百倍にも増している今の暗黒の時に於いて(3T328 参照)、私たちに必要なのはより多くの牧師、お金、建物、施設、または新しいプログラムではない。私たちが必要としているのは全世界を揺り動かすことのできる、聖霊に満たされた男女である。教会が今緊急に必要としているのはそのような働きである。それこそが神のグローバル・ミッション(全世界福音宣伝)における最後の働きになるのである(マタイ 6:33 参照)。

「間近に迫っている大いなる論争点(日曜遵守令)によって、神が指名されていない者が取り除かれ、神は後の雨を受ける備えができた純粋で真実な清められた働きを持たれるであろう」
(手紙 55 1886 年)。

教会のすべての働きが清められて初めて、私たちは後の雨を受ける準備ができるのである。福音宣伝の働きを終わらせるための聖霊を我が教会に注いでもらうために今、主が清められた働きをもつことが不可欠なのである(マタイ 24:14 参照)。

時はやがてなくなるが、私たちにはもっと輝かしい働きがまだ残されている。この働きとは、世の中を真似て似せることではなく、人々を世から呼び出すことである。神がサタンと全く違うように、私たちも世と違う者でなければならない。私たちは神から反逆しているこの文化を慕ったり、同じように同化することを願ってはいけない。私たちは更に良い国を熱望し、仰ぎ見るべきである。最終的に私たちは、世に神の愛の品性を立証しなければならない。その時、数え切れないほどの群衆がメッセージを受け入れてこの教会に加わるのである(黙示録 7:9 ; CT532 参照)。

神は、全地を明るくするメッセージを伝える清められた小さな群れに

向かって（黙示録 14:1,2 参照）今訴えておられる。「彼らの間から出て行き、彼らと分離せよ、…あなたがたは、わたしのむすこ、むすめとなるであろう」（Ⅱコリント 6:17,18）と。時はなくなりつつある。今が変わる潮時である。私たちが今すぐ必要としているのは真のリバイバルと改革なのである（1SM121 参照）！

教会の中にあらゆる偽りがはびこっているこの最終時代において（3T266 参照）、自分が敵に打ち負かされないために私たちは何をしなければならぬのだろうか。聖書は次のように勧告している：「あなたがたは、この世と妥協してはならない。むしろ、心を新たにすることによって、造りかえられ、何が神の御旨であるか、何が善であって、神に喜ばれ、かつ全きことであるかを、わきまえ知るべきである」（ローマ 12:2）。私たちの感覚を、腐敗した社会の魅了する音やきらびやかなものにさらすのは危険である。

多くのアドベンチスト・クリスチャンたちの心は世的風習、習わし、また影響によって闇に包まれ、光と闇、真理と誤謬を見分ける力が全く失われている（5T62 参照）。このような世的妥協が私たちが善と悪の区別ができないように盲目にするなら、神の時にならざる警告に真剣に耳を傾けることは何と重要なことであろう。それを無視するのは危険だけでなく、致命的である！

私は、サタンが神の残りの教会を滅ぼすために用いている最も恐るべき手段について気付いてもらいたいのである。闇の君はいつも私たちの礼拝を求めてきた。そして、彼はこれまで以上に断固とした構えを見せている。あの年を経たへびは益々怒り狂っている。何故？彼に残された短い時を除いては、勝つ見込みがないことを知っているからである。自分を巧妙に隠すことによって、サタンはようやく「聖霊の働き」という仮装を着けて私たちの教会に侵入してきた。

そして信徒たちは敵の企みを見破れないのである！ どうやら、今まで長年の間世と妥協してきたことによって、霊的防御が弱められたようである。悪魔の偽りの音楽によって少しずつ頭脳が慣らされて催眠術がかけられ、私たちの教会の尊い信徒は悪魔を「すばらしい働きをしている

友」として迎えるほど操られてきたのである（5T294 参照）。

このようにして今、音楽と礼拝という名の下にサタンと悪霊たちのありったけの醜さが現れているのを聞いたり感じたりすることができる。混乱してだまされている信徒は、別の霊の働きなのに、それは神による働きだと信じ込まされている（大争闘下 191 参照）。これは今世紀の最も悪質な偽りである。聖霊はどのようにしてサタンの音楽を通してご自分を表せるだろうか（2SM36 参照）？悪魔は音楽家であることを忘れてはいないだろうか？この教会の初期の墮落をもたらすためにサタンが創作した音楽が今日、徐々に選民の間にまで侵入してきているのである！

今まで我が教団の歴史において、数多くの異端による危機が起った。サタンは何度も偽物の霊を教会に持ち込もうとしてきた。しかし神は、時の終わりに神の民を待ち受けている怪しげな危険が私たちの教会に入り込んでくると、主のしもべに言われた。それは「オメガ」と呼ばれ、「きわめて驚くべき性質のものとなるでしょう」（セレクトッドメッセージ 1 巻 265）と預言された。これを見たホワイト夫人は「民のために震えおののいた」。

最近、我が愛する教会を襲ってきているこのカリスマ的「セレブレーションの音楽」が、預言されていた「背教のオメガ」ということはあり得るだろうか？以前、世俗音楽は下から、教会の中の若者たちによって推進されてきた。現在、1900 年以來初めてサタンの音楽が上から、責任ある地位にいるある指導者たちによって、持ち込まれているのである。歴史は確かに繰り返される。なぜなら、これは古代イスラエルにも起きたことであった！だから預言者イザヤは次のように記している。「この民を導く者は、これを迷わせ、彼らに導かれる者は、のみ尽くされる」（イザヤ 9:16）。

アドベンチズムにおける音楽の大危機のさなか、真の教会を欺くために最も普及している霊の敵として、悪魔が世との妥協を用いていることをわきまえ、神の勧告を心に留めようではないか。「彼らの間から出て行き、彼らと分離せよ」（Ⅱコリント 6:17）。「神がわたしたちを召され

たのは、汚れたことをするためではなく、清くなるためである。こういうわけであるから、これらの警告を拒む者は、人を拒むのではなく、聖霊をあなたがたの心に賜る神を拒むのである」(1テサロニケ 4:7,8)。

「わたしの民は知識がないために滅ぼされる。あなたは知識を捨てたゆえに、わたしもあなたを捨てて、…」(ホセア 4:6)。
「すべてわたしの愛している者を、わたしはしかったり、懲らしめたりする。だから、熱心になって悔い改めなさい」(黙示録 3:19)。

私たちの音楽は神の側に立つ備えをさせるものなのか、それともサタンの側に付かせるものなのだろうか？

「世と結合している者は世の鋳型を受けており、獣の印を受ける準備をしている。そして真理に従うことによって魂を清めている者は天の鋳型を受けており、神の印を受ける備えをしているのである」(5T216)。

私たちが悪魔の音楽、もしくは世が提供するすべてのものに妥協すれば、私たちは彼の力に屈服するように準備させられている(国指上 156 参照)。やがて、SDA と自称している大多数の者は最終的に信仰を捨ててサタンの側に加わる。彼らは世と妥協したために失われるのである(1T 608,609 参照)。

残りの教会に向けられているサタンの最後の攻撃を目撃している今、私たちは決断を迫られている。教会の危機という闇に包まれている今、与えられている警告を心に留めてあなたは真理に従うだろうか？愛をもって、サタンの罠にかかっている人々を救おうとするだろうか？墮落しつつあるこの SDA 世代に、このメッセージを伝えるだろうか？もし、あなたがしなければ、神の尊い民の大多数は知識がないために滅びるのである。

「神の民が責められるべき罪の中で、神が特に忌み嫌われる罪があるとすれば、それは緊急事態において何もしないという罪

である。宗教的危機において、無関心と中立の姿勢は神の目から極悪な犯罪としてみなされ、神に対する最もあくどい反抗としてみなされるのである」(3T281)。

私たちが人間の意見か神の言葉のどちらかを選ばなければならないとき、たとえたった一人で立たなければならないとしても、神の御言葉を選ぼうではないか。

「大多数から捨てられてもなお真理と義の擁護のために立ち、勝利者が少ないときでも主の戦いを戦うこと、これが私たちに与えられるテストである」(5T136)。

それだから、揺るがぬ勇気をもって私たちの信仰の柱を擁護しようではないか！「わたしたちは、善を行うことに、うみ疲れてはならない。たゆまないでいると、時が来れば刈り取るようになる」(ガラテヤ 6:9)。「わたしの声に聞きしたがいなさい。そうすれば、わたしはあなたがたの神となり、あなたがたはわたしの民となる」(エレミヤ 7:23)。時の終わりに近づくにつれ、讚美歌は新しい意味合いを持つようになるであろう。なぜなら、

「地上の最後の大いなる危機の影が深まっていくときに、神の光は最も明るく輝き、希望と信頼の歌は最もはっきりと、そして最も高らかな調べとなって聞かれるであろう」(教育 196)。

願わくは、光を見分ける力があるように。そしてその歌を歌う特権が与えられるように。

「見よ、これはわれわれの神である。わたしたちは彼を待ち望んだ」(イザヤ 25:9)。



第3章 残りの民とエキュメニカル伝道 2000

A. アドベンチストのジレンマ：福音をまだ聞かない人達にどう伝道するか

50億以上の世界人口の5分の1以上は、イスラム人口である。非クリスチアンの75%は、ヒンズー、イスラム、中国人である。1900年には世界人口の35%がクリスチアンであった。1960年には30%に落ち込み、2000年には、20%に落ち込むであろうと推測されている。どこを見てもキリスト教会が落ち込んでいるのを見ると、果たしてキリスト教は生き残れるかと、多くの者は問うであろう。

ワールド・ビジョン・インターナショナル・ニュースレター、MARC1991年3月号の「イギリスで何が起きているか」という記事によると、

「1979年～1989年の、過去10年間にわたって、イギリス人の教会礼拝出席者が毎週1千人減った。つまり、50万人が教会出席を止めたことになる。さらに心配なことは、教会出席を止めた者10人中7人が20歳以下ということである」。

SDAにおいては、毎年70%以上の青年が教会を去っていると言われている。しかし、青年だけが問題なのではない。新しく教会に加わる者たちの2人中1人以上を失っている。新しい信者のほとんどは最初の一年間に去ってしまう。「過去のどの時代にも見ない、6,500万にのぼる信者が、背教状態にある」。終わりに近づけば近づくほど悪くなっている。世俗の楽しみが洪水のように迫って来る中で神の残りの民は、悪の勢力との厳しい戦いに入っているのである。「悪魔の策略に対抗して立ちうるために、神の武器で身を固めなさい。わたしたちの戦いは、血肉に対するものではなく、もろもろの支配と、権威と、やみの世の主権者、また天上にいる悪の霊に対する戦いである」(エペソ 6:11,12)。

このような苦境に立たされている教会はどのように世界を伝道し、キ

リストを迎える事が出来るだろうか？サタンは自分のグローバル・ミッションを作り出すだろうか？

B. サタンのグローバル戦略：エキュメニカル伝道 2000

人間的な見地から不可能と見える世界のキリスト教化のために、クリスチャン・グループによって大衆伝道による大衆増加運動が起こされた。計画は次のようなことに基づいている。

①世的な催し物などのレベルにできるだけ近づく。

②教派の壁をできるだけ越えて働きかける。

大勢を教会に導きいれるという目標を達成するために、宗教の装いのもとに、世的な音楽の催し物を使い、人々を魅了する。こうして残りの民を崩壊させるサタンの作り出した音楽は、ついには世界を破壊する悪魔の道具となる。

エキュメニズム（教会一致運動）の装いのもとに全教会を合同させる大運動が展開するとき、SDAは終末事件の預言からその真相をつかんでいなければならない。ロバート・マイヤーの、「世界共同運動への提案」という本に、すべての教派がどのように結合し、世界教会を作るかが記されている。思慮のあるSDAであれば、それがどんな意味を持っているかはっきりと理解するはずである。黙示録 16:13 による三者の結合の預言を知っているはずである。カトリック、プロテスタント、心霊術の結合である。この預言の成就をよく見守っていなければならない。

①1987年、世界福音派連合会議のアフリカ人の議長は言った：「どの単独の教会(その大きさ、資源にかかわらず)一つの教会では全世界に伝道することはできない。その働きを成し遂げるには、すべてのキリスト教会が一緒にしなければならない」と。

②1989年1月、シンガポールにおいて50ヶ国を代表する314人のミッション・リーダーが、「2000年までに伝道を完成させようというグローバルな相談会」に参加した。彼らは全教会が協力、参加することに同意した。

③1989年1月に、テキサス州で世界キリスト教協議会が開かれた。

強調点は、「セクト（分派）的な壁は捨て去って、世界伝道を一緒にする」ことであった。

④1991年2月、オーストラリアの首都、キャンベラにおいて第7回目の世界キリスト教協議会が開かれた後、100ヶ国以上の国々において、317の諸教会が増え、3億5,000万のクリスチャンに増えた。しかし、ここにすべてのSDAが目覚めるべきニュースがある。

C. ペンテコステ的心霊術：そのエキュメニズム（教会一致運動）における役割

1991年のワールド・ビジョン・インターナショナルによると、今世紀末の伝道上最も意味深いことは、ペンテコステ/カリスマグループの急増である。「荒れ狂う大火事」とも考えられている。今や、1万1,000以上のペンテコステ派の教会、3,000以上の独立カリスマ的グループに急成長している。7,000の国語、8,000の民俗言語文化にわたる運動は、最も優勢なものとなっている。

また、これらのグループは、「エキュメニカル伝道」こそ全世界をキリストに導く唯一の方法だと強く信じていることを、その報告は明らかにしている。1991年の報告は、全世界にまたがるこれらのグループは、過去25年にわたって存在してきたことを述べ、①3億8,200万の会員を持ち、②毎年1,900万の増員があり、③毎年340億ドルもキリスト教伝道のために捧げていることを明らかにしている。このペンテコステ運動は、カトリック教会に大いに認められ、受け入れられている。1972年1月23日発行のカトリック・リーダーという雑誌の8ページで次のように述べている：

「聖霊のペンテコステのパプテスマを信じるのが、すべてだとは言えなくとも、ほとんどの教派の壁を突き崩すように見える」。

プロテスタントも驚嘆と承認をもって、ペンテコステ運動の世界伝道に果たす役割を認めている。1972年2月4日の「Christianity Today（キリスト教の今日）」という雑誌はこう宣言している：

「世界にまたがる近年のキリスト教リバイバルに、最も大きな貢献をしているのはペンテコステ運動のように見える。これは教会史において、最も重要な位置を占める時代の一つのように見える」と。

今、まさに目指すゴール達成の唯一の手段として、ペンテコステ派的心霊術に人々の目は向けられている。

最も有効な礼拝方式とは何であろうか？ミュージカル・セレブレーションである。礼拝は、だいたいにおいて宗教的な言葉を着せた世のポピュラー音楽によって支配されている。彼らの音楽の特徴は反復、シンコペーション、計画的ビートの連続とエレキギターによってテンポを次第に早く、そしてピッチを高くすること、ヘビーベース（重低音）、そしてドラム。手をたたき、手を挙げ、軽佻浮薄、感情的に狂信行為... これらを彼らは神からのものだと信じる。心に催眠術をかけ、神の真の品性を間違えて伝える、まさにサタンだけが作るような音楽について、民として私たちは、幾たびも幾たびも警告されている。再臨直前のサタンの欺瞞について、教会への証 746 ページに次のようにある：

「私たちの前途には、すべての勢力としるしと偽りの不思議をもって、そしてすべての欺瞞をもって神のご品性を間違えて伝えようと働く最後の大争闘が迫っている。それは、できれば選民をも惑わすためである」。

ここではっきり、ペンテコステ的心霊術とサタンの音楽が直接関係していることが分かる。

ペンテコステ的心霊術は驚くべき預言の成就

心霊術は、地上の大きな勢力—カトリック、プロテスタント、そして東洋の大宗教—をついに結合させるボンドのような働きをする。E・G・ホワイトは、最後の時代のサタンの最も有力な勢力は、心霊術の教えであると預言した（大争闘下 268 参照）。彼女は、現代心霊術は聖書に対する信仰を告白し、キリスト教の礼拝に対する尊敬を表明するために、彼らの働きは神の力として受け入れられることを示された。心霊術

が既存のキリスト教の装いをしてくるため、それは更に大きな欺瞞と罠になる。感情的な興奮を伴い、迷いに導くように偽りと真理を混ぜるため、教会は得意げになり、神が驚くばかりに働いていると思う。しかし、それは別の霊が働いているのである(大争闘下 350-351,190-191 参照)。

1991年2月に、オーストラリアのキャンベラで行われた世界キリスト教協議会に全世界から集まった幾千ものクリスチャンたちは、礼拝が終わった後、アフリカの歌にある、催眠的なビートのもとで歌い、字義通り踊りながら大会場を出てきた。サタンだけが作り得る音楽に麻痺され、動かされながら、人々は神を賛美していると信じているのである。

マラカイ・マーティン氏の「この血の鍵」という本は、世界の注目を浴びた。その本でローマ法王は、世俗主義を「今日の国々の社会を形作る最も大切な力」としている。ヨハネ・パウロ二世は、世俗主義を「主要な地方的な勢力」(355-359)と高く評価している。同様に、叫び、騒々しく歌い、手をたたき、足でドンドンとリズムを取る、体を揺らすような、ペンテコステ/カリスマ的キリスト教は、今日「地上の勢力」と見なされている。地上を支配する一般的な勢力としての世俗主義と共に、地上の住民は次の動きを待つのみである。ペンテコステ的な背景を持つアフリカは、その文化的必要に答えるのでペンテコステ的キリスト教へと急速に変わりつつある(グローバル教会成長 1991年12月)。全世界の国々もそうなりつつある。

催眠的なロックやジャズのビートによって、絶えずマッサージされているようである。音楽は人間の行動に影響を与える最大の刺激で、サタンは人間の心を自らの心と結び付けるのに成功してきた。法王権を悪魔の右腕(TM473 参照)とするなら、法王の言っている世俗主義は国々の社会を形作る第二の勢力となりつつある。

何年も前に、E・G・ホワイトは、ヨハネ・パウロ二世が世俗主義について言っていることの正当性を最も驚くべき表現で預言した。彼女は、クリスチャンも非クリスチャンも、共にペンテコステ的心霊術に容易に合流すると預言した。カトリックも、プロテスタントも力を入れている信心深い形を受け入れると述べた。

「現在は自称キリスト者と不敬虔な人達との間の区別がほとんど分からない。教会員は世の人々が愛するものを愛し、すぐに彼らといっしょになるので、サタンはこの人たちを一体として結合させ、すべての人を心霊術の味方に引き入れることによって、自分の立場を強化しようと決意している」(大争闘下 351)。

この預言の成就として、闇の支配者はすでにすべての人を心霊術の味方に引き入れるグローバルな計画を用意している。1991年7月、5,000人の教会の指導者たちが、イギリスのブライトンに集まった。世界伝道のための第一回国際カリスマ会議であった。カトリック、プロテスタント、ペンテコステ派教会から集まった、史上かつてないエキュメニカル(教会一致)会議の一つであった。

この20年間で急速に預言は成就しているのに、私たちの説教は幻想的になりつつある。エキュメニズム(教会一致運動)は、敵の巧妙な「SDA教会に対する最後の運動」(5T294参照)である。

しかし、すべての教会の結合というより以上に、その運動に含まれている意味は、世界教会を形作る主要な道具になるということである。

「教会員は世の人々が愛しているものを愛し、すぐに彼らといっしょになるので、サタンはこの人たちを一体として結合させ、すべての人を心霊術の味方に引き入れることによって、自分の立場を強化しようと決意している」(大争闘下 351)。

世の人々というのは、ヒンズー教徒、イスラム教徒、仏教徒、神道信者、道教信者、シーク教徒、ユダヤ教徒、異教徒、無神論者等々...である。非常にはっきりと主のしもべは、大争闘下 350-351 ページにこのようなシナリオを書いている。

心霊術の味方に引き込む

「旧教徒、新教徒、それに世俗の人たちもみな同じように、力のない形だけの敬虔さを受け入れるであろう。そして彼らはこの合同の中に、全世界を改心させるための一大運動と、長く待

ち望んでいた福千年期の先触れを認めるのである」(大争闘下 351)。

つまり、この大衆はこの大合同によって世界伝道という大事業が達成されたと信じ込まされるのである。神のみ言葉は決して裏切らない。

この預言された**教会合同は、神の残りの民にどのような影響を与えるだろうか?**このことで、SDAは聖書の真理を保持するか、それとも偽りの教えに従うかを決定する瀬戸際に立たされる。サタンは、全世界を自分の味方に引き込もうとする方法を学んできた。それは「世の人々が愛するものを愛する」ことにある。これが鍵となる。それによって世俗の人々も、クリスチャンも「すぐにいっしょになる」のである(大下 351)。「すぐにいっしょになる」という言葉は、重大な準備の働きがなされたことを意味する。

何千年もの間、大欺瞞者は世俗との妥協という方法で人間の心を調整し、操ってきた。サタンは古代イスラエルを陥れることに成功した。初代教会も同じように、世の人が愛するものを愛するように導かれた。同じ方法でSDAも破滅に備えられつつある。世と妥協することによって、わが民の大部分は敵の側に加わり、失われるように備えられるであろう(1T608,609; 国指上 156; 大下 378 参照)。

「一步、一步世俗の要求に屈服して、世俗の習慣に妥協した人々は、その時、嘲笑、侮辱、投獄と死の驚異にさらされるよりは、地上の権力にしたがってしまうのである」(国指上 156)。

「あらしが迫ってくるとき、第三天使の使命を信じると公言していながら、真理に従うことによって清められていなかった多くの者が、その信仰を棄てて反対の側に加わる。彼らは、世俗と結合し、その精神を抱くことによって、ほとんど同じ見方で物事を見るようになっている。そして、試練が来ると、彼らはすぐに安易で一般受けのする側を選ぶのである」(大争闘下 378)。

「教会と法王制の間の距離を短くしているのは、背教する教会

である」(信仰による義認 1894年2月)。

「世と結合している者は、世の鋳型を受け、獣の刻印に備えているのである」(5T294)。

これらの引用文は、人間の心を支配しようとするサタンのものすごい心理学的なプログラムが働いていることを表す。

この教会に反対するための悪魔の最後の働きは、多くの者がその存在さえ信じられないほど自分自身を隠し、彼の驚くべき活動と力を見分けられないように働くことが予告されている。過去の彼の記録をほとんど忘れ、彼が一步進んだ動きをすると、彼らは敵であることを認識できなくなり、かえって良い働きをする良き友と思うようになるのである(5T294)。神の残りの民を盲目にし、彼の策略を見破ることに無知であるようにしておくことは、彼のよく研究した計画である。主のしもべは言う：「この大欺瞞者が最も恐れていることは、我々が彼の策略を見破ることである」(大争闘下 258)。彼の最も破壊的な、巧みな策略は欺瞞である。それは悪と善をまぜることである(教育 15 参照)。

D. 残りの教会とペンテコステ運動

1970年代に、大欺瞞者は、世俗的宗教音楽によってこの教会に侵入しようと大胆にも試みた。その時は、多くのアドベンチストの心は、すでに過去20年間、個々の家でAV機器で備えられ、操られ、催眠をかけられていたのである。サタンの最大の欺瞞、すなわち、良い音楽と悪い音楽を混ぜることによって、彼は神の民の側に盲目のうちに、しかも、熱烈に歓迎されるようになってきた。

サタンが欲しいのは私たちの礼拝である。かつて天での音楽の巨匠であった彼は、私たちの礼拝を獲得するのに使う的確な策略を知っている。心をコントロールする音楽の偉大な力について、サタンは、「彼らが彼の力によって麻痺されている」間、「最も強い力で、大勢の人々に影響を及ぼす」ために音楽を使うことを、前もって警告されている(1T506 参照)。悪魔は、青年たちがこの事を知るのを嫌うのである。

教会として私たちは、音楽の高い標準を持つ団体として知られてきた。

しかし、その特殊性は失われてきた。真の教会への悪魔の潜入は徐々に徐々にとやってきたが、確実であった。悪魔は、最初ペンテコステ教会に持ち込んだ世俗と宗教的音楽を混ぜるということを実行し、わが教会を過去 20 年以上も前から整えてきた。この事は多くの者に衝撃を与えるであろう。そのことを知らなかったなら、今そのことを知るべき時が来たのである。ナイトクラブ調の福音音楽が〇〇〇によって持ち込まれたのは、直接ペンテコステ教会からであった。1970 年代以来、あなたの生活を形作ってきた世俗プラス宗教音楽は、ペンテコステ派教会から字義通りコピーしたものである。そういうものとは「何の関わりも持っていない」と警告されてきた。

1 世紀以上も前から、わが教会はペンテコステ的心霊術について警告されてきた。それにもかかわらず、わが民はその力に欺かれ、麻痺させられてきた。多くの者はそれに気がつかない。闇の働きを見分ける事ができないのである。しかし、ある他教会は識別している。1981 年に「サタンの音楽を暴露する」を出版した著者は、アドベンチストではないが、アドベンチスト教会が「世にますます近づいている」とし、その音楽は「世のそれと何ら変わらない」と論評している。教会は、音楽について預言の霊が警告していることを、20 年以上も前から無視してきたのである。

だから、主は他の教会を通して私たちに警告せざるを得なくなったのである。今日、非 SDA の著者が音楽におけるサタンの欺瞞についてわが民を警告する本を出版している。しかし、世を愛する心が定まってからは、あらゆる方向から来る、時期にかなった警告を無視しているように見える。それに、あまりにもテレビに時間を取られ、これらの警告の本を読む時間さえないのである。これはまさに、悪魔の計画である。サタンの今世紀最大の発明であるテレビは、SDA の家庭にまんまと入り込んでいる。それゆえに、神からの重要な教えはないがしろにされ、忘れ去られ、軽視されている。光が拒まれると、ついには暗黒となる（ヨハネ 12:35,36 参照）。

間違ったことが絶えず繰り返されると、それは正しいとされる。これ

が、今日の私たちの現状である。残念なことは、私たちの真の状態に気がつかないということである（黙示録 3:17 参照）。妥協することによって盲目にされ、この教会を滅ぼす次の大きな、大胆な動きに備えるための、悪魔の音楽テクニックに気がつかないのである。だから 1989 年に、ついに世俗プラス宗教音楽がわが教会に持ち込まれたときに、世が愛するものを愛する多くの者によってすぐ受け入れられるようになったのである。大欺瞞者の今世紀の驚くべき欺瞞は、音楽的欺瞞であることがお分かりいただけると思う。

事前に世俗と妥協する者たちに慣らされることによって、彼らは音楽の背後にある悪の隠れた力を察知できなかった。更に悪いことに、他の多くの者は、問題の重大さを無視して中立の立場を取るのである。ある人は言う、「もしこのような礼拝形式で、青年たちを教会にとどめておくことができるなら、それでいいじゃないか」と。何という考えだろう。礼拝の間、青年たちが楽しい時を過ごしているのなら、悪魔と悪霊が周りにいても構わないではないかと単純に考えている。これらの愛する者たちのために祈ろうではないか。次のように警告されている：

「宗教的な危機において、無関心と中立は、神に対する最悪の敵意に等しいとみなされるのである」（3T281）。

責任の地位にある、ある者たちは、人気落ちることを恐れて「まあ、時の成り行きを見てみようじゃないか。あまり判断を急ぎすぎではならない」と言う。愛する教会の講壇に、すでに悪魔とその軍勢が立っているのを、傍観していいのだろうか？それとも、テレビやラジオ、テープレコーダーから流れてくる音楽を通して、今日の新しい音に潜在しているサタンに気づかないほど催眠術をかけられた状態なのだろうか？世俗と妥協することによって心は暗黒になり、混乱し、多くのアドベンチストは真理と偽りの区別をする事ができなくなると、預言者はわが教会に警告した（5T62 参照）。

キリストの再臨に先立って、私たちが直面する最大の問題は、死か迫害かという問題ではなく、いかに真理と誤謬を見分けるかということ

ある（大争闘下 344 参照）。もし世を愛する心が今識別力を取り除くのであれば、時にかなった神の警告に留意することはどんなに重要であろうか。

ペンテコステ的キリスト教をわが教会へ導入

音楽を通して、また責任者のある者たちの励ましと勧めによって、アドベンチスト教会にそれが持ち込まれるのを見て、わが教会は、かつてない最大の危機に直面していると思っている人も少なくない。

「Christianity Today（キリスト教の今日）」1990年2月5日号に、わが教会に関して驚くべき記事が現れた。題して「近年のセブンスデー・アドベンチストに関する真実」というものであった。それは、SDAはペンテコステ的になりつつあるというものであった。その記事は大胆にも、「カリスマ的再生に抵抗してきた教会においては、これは驚くべきことである。しかし、それはアドベンチズムの順応性を示している」と。

また、オーストラリアの「ロック」という雑誌の1990年5月号で、「霊と共に動く」という記事が同じようなことを述べている。それは、「ペンテコステ的になる SDA 教会のことを非常に心配している」と表現している。SDA 教会が背教している事を譴責しているのである。神の言葉は、「実を結ばない闇のわざに加わらない」ようにと警告している（エペソ 5:11）。ご自分の民に対する愛の警告である。

E. セレブレーション音楽とエキュメニズム（教会一致運動）

神の警告は間違ふことのないほど明確である。世界統一がなされようとする時、今はもうローマ・カトリック教会からの危険はないと考える人たちがいる。彼らはローマの戦略を知らないのだろうか。彼らの時が来るまでは、愛と一致を世界にアピールするのである。しかし、神の預言者は実に驚くべきことを描写している：

「ローマ教会の抜け目なさや狡猾さには驚くべきものがある」
「人々は法王制の真の性格、またこの教会が支配権を得たとき心配される危険に対して目を閉じている」「プロテスタントの

世界は、ローマ教会の目的が実際に何であるかを知ったときには、もはや手遅れになってその罠を逃れる事ができないであろう。「彼らは自分が手を下す時」「時機を待っている」のである(大争闘下 339,322,341,339)。

このような警告を与えられた神をたたえようではないか。しかし、だからと言って出ていって人々を譴責してはならない。カトリックの人々を愛し、神が何とっておられるかを告げなければならない。

黙示録 13 章の預言の成就

私たちは黙示録 13 章の預言の成就を日ごとに見ている。残りの民に対する音楽による攻撃と、ローマの支配と、どのように関係してくるのだろうか？主のしもべによると、ローマはアドベンチズムの最も危険な敵である(大下 322 参照)。今日、日曜休業令はますます強調され、666 は多くの者によって広く気づかれている。

マラカイ・マーティン氏は、その著書「この血の鍵」で、ヨハネ・パウロ二世こそ新世界秩序のリーダーシップをとるべき人だと宣言している(プロテスタント 639)。

E・G・ホワイトは、ローマ教会について次のように預言している。

「再び世界を支配するために、また迫害を復活させるために、またプロテスタントがおこなったすべてのことを無効にするために、激しい決定的な戦いの準備として、その感化を広げ、その勢力を強めようと、あらゆる手段を用いている。」(大争闘下 321,322)

今日の SDA 音楽の背教と獣(ローマ)とどんな関わりがあるか？

E・G・ホワイトは「世俗と結合している者は、世俗に型どられ、獣の刻印に備えているのである」と言っている(5T216 参照)。サタンはただ、世の人が愛するものを愛するように導くだけでいいのである。それだけですぐ彼の側に加わるようにさせるに十分である(大争闘下 351 参照)。世の音楽と妥協することによって、私たちはローマへ進んでいるのである(ST1894 年 2 月参照)。

20年以上前から教会に持ち込まれたペンテコステ的音楽に対して声を上げる人は、そう多くはなかった。この巧妙な音楽の欺瞞は、好むと好まざるとに関わらず、私たちを獣の刻印に備える武器である。だから、SDAの多くの者がただ世俗の音楽に加担するだけで、失われてしまうのである。悪魔の策略はそんな単純なものなのである。

この音楽背教のルーツは？

ペンテコステ運動だけではなく、世界教会(one world church)でもある。エキュメニズム(教会一致運動)、セレブレーション礼拝を通して、ローマの教会にすべての人を結びつけるのが狙いなのである。一つの音楽スタイルの目的は、全世界が日曜日に礼拝をするようになることである。元イエズス会士の、アルベルト・リベラ氏は言う：

「SDA教会はその歴史の中で最も攻撃される標的になってきた。ローマ・カトリック教会は、この教会(SDA)が最も驚くことを準備している。日のことに関して、大争闘はついに完了するであろう。主要問題は、土曜か、日曜かということである」
(SDAへのカトリックの攻撃、ジャン・マーカセン)。

民として、私たちは安息日問題が焦点となることはよく知っている(黙示録 13:4-8 ; 7BC979 参照)。それは切迫している。

世界の三大勢力の結合は今起きている。サタンの指揮の下に、セレブレーション礼拝がローマによって計画され、生み出され、背教プロテスタントイズムによって養われ、推進され、ペンテコステ運動によってあおられ、力が与えられた。はっきりしていないだろうか。サタンは私たちの礼拝を欲しているのである。セレブレーション礼拝を通して全教会をローマの囲いの中に入れることが、悪魔の計画である。

F. 神のグローバル戦略はエキュメニズム(教会一致運動)ではない

今日、歴史の風は強烈さを増して終わりに向かっている。あらゆる種

類の欺瞞が教会の中にある。預言者が、音楽の背教が「恩恵期間の終了する直前に起きる」(2SM36)と預言したことがついに来たのである。神の民は分かれ道に立っている。彼らは神に従うだろうか、ローマに従うだろうか。ペンテコステのカリスマ運動が神の残りの教会に入り込んだことは、預言されている初代教会の敬虔の大リバイバルが起ころうとする瀬戸際に立っている証拠である。

「地上に神の最後のさばきが下るに先立って、主の民の間に、使徒時代以来かつて見られなかったような初代の敬虔のリバイバルが起きる。神の霊と力が神の子供たちの上に注がれる」(大争闘下 190)。

ここに、主がご再臨なさる前に真のリバイバルが起きることが預言されている。しかし、サタンは第二のペンテコステが起こることを望んでいない。偽物を起こすことによって、それを妨げようとするのである。

「魂の敵は、この働きを妨害しようとする。そして、こうした運動が起こる前に、偽物を提示することによってそれを妨害しようとする。彼は、自分の欺瞞の力の下におくことのできる諸教会において、神の特別な祝福が注がれているかのように見せかける。大いなる宗教的関心と思われるものが現れる。多くの人々は、神が彼らのために驚くべきことをしておられると喜ぶが、それは、別の霊の働きなのである。宗教的装いの下に、サタンは、キリスト教世界に自分の勢力を広げようとする」(大争闘下 190-191)。

サタンは、神の聖霊が注がれる時が間近に迫っていることを知っているのである。自分の負け戦であることを知りながら、彼はできるだけ多くの者を自分の味方に誘い込みたいのである。「人に惑わされないように気を付けなさい」とイエスは言われた(マルコ 13:5)。神の言葉が私たちの保護である。「ただ律法と証とに求めよ。彼らの言うことがこれにかなっていなければ、それは彼らの内に光がないからである(イザヤ 8:20 欽定訳)。

キリスト教は生き残れるか？

キリスト教は生き残る。世は音楽の背教のため獣の刻印を受けるが、預言者は、獣を拝しないで、獣の刻印を受けないグループを見せられた(黙示録 14:12 ; 7BC979 参照)。近いうち、世界はラオデキヤから脱出して聖霊の力に満たされる特別なグループを見るであろう。

ヨハネは、黙示録 7 章の大嵐が吹きまくる前に、神の印を受けたグループを見た。日曜休業令が発布される前から、神は一つ一つの真理に従って魂を清め、後の雨に備える人々をお持ちになるであろう。全世界に日曜日が強制される時、神は第三天使に加わる、第四の天使を送られる。後の雨による大いなる叫びである(黙示録 18:1-4 参照)。その時、全地は神の栄光で満たされる。その時、神の働きは、山火事のような、稲妻のような速さで終わる。これが神の最後の世界伝道プログラムである(グローバル伝道 2000 によるのではない)。

「それが非常な力で伝えられる時が来るならば、主は謙遜な器を通して働かれ、主の奉仕に献身した人々の心を導かれる。働き人は学歴ではなくて、聖霊を注がれることによって資格を与えられる」(大争闘下 376)。「間近に迫っている大問題は、主が指名されなかった者たちは抜き取られ、そのかわり神は後の雨のために聖い、真実な、清められた伝道者を備えられるであろう」(手紙 55 1886 年)。

最後の収穫は、「数え切れないほどの群衆」となるであろう(黙示録 7:9)。「大群衆が...最後のときに収穫されなければならない」(TDWG 163)。「こうした言葉を聞いたことのない者が、幾千となく耳を傾ける」(大争闘下 376)。「その時、多くの者が神と神の言葉の代わりにこの世を愛してきた諸教会から離れる」(大争闘下 190)。その時、地の最後の収穫(大群衆)も神の印を受けるため世を愛する心を捨てるのである(CT532)。

G. 大いなる叫び：神の最後の伝道プログラム

誰にもだまされてはいけない。大いなる叫びこそ総合世界伝道プログ

ラムである（エキュメニズム、教会一致運動ではない）。この第四の天使の働きに参加できない者たちについて、E・G・ホワイトは「特権と機会が与えられながら、正しくその働きをしそくなった者たちは、取り除かれるであろう」（Man.#64, 1894年）。「自分自身の働きに頼り、第四天使の働きに無関心な者たちは、その最後の働きにおいて、勝利にあずからないであろう」と書いている（RH1890年12月23日）。

では、だれがこの大伝道の働きに参加するか？

「すべての点で合格し、すべての試みに耐え、そして勝利し、その価値がどんなものかをあらわした者たちは、真の証人の勧告に心を留めてきた。彼らは後の雨を受けるであろう。そして、このようにして天に移されるにふさわしい者とされるのである」（1T187）。

「第三天使の使命は、その栄光で全地を照らす。しかし、力ある方によって誘惑を退けた者のみが、大いなる叫びに膨れ上がるときに、それを宣べ伝えることが許されるのである」

（RH1908年11月19日）。

第二ペンテコステの偉大な力が、次のように神の言葉に描写されている：「この後、わたしは、もうひとりの御使が、大いなる権威を持って、天から降りて来るのを見た。地は彼の栄光によって明るくされた」（黙示録 18:1）。

「福音の大いなる働きは、その開始を示した神の力のあらわれより劣るもので終わることはない。福音の開始にあたって秋の雨(前の雨)となって成就した預言は、その終局において、春の雨(後の雨)となって再び成就するのである」（大争闘下 382）。

何とすばらしい輝かしい機会が待っていることだろう。全力を尽くしてその働きに参加できる者になろうではないか（7BC970）。

「その日わたしはまたわが霊をしもべ、はしために注ぐ」（ヨエル 2:29）。

第4章 キリスト再臨前のアドベンチスト音楽

A. 今の時代を知る

使徒パウロの言葉は、今日の私たちにとって厳粛な警告である。1990年代のアドベンチスト青年に、特に当てはまる。「なお、あなたがたは時を知っているのだから、特に、この事を励まねばならない。すなわち、あなたがたの眠りからさめるべき時が、すでにきている。なぜなら今は、わたしたちの救が、初め信じた時よりも、もっと近づいているからである。夜はふけ、日が近づいている。それだから、わたしたちは、やみのわざを捨てて、光の武具を着けようではないか」(ローマ 13:11,12)。

どの時代よりも終わりは迫っているのだから、目を覚まそうではないか。

終わりに近づいている顕著なしるしの一つは、私たちの教会史において、過去 20 年間を見ると、かつてなかったほど世俗の音楽が神の民に災いをもたらしていることである。教会外の観察者から、SDA の音楽はもはや世俗と変わらないと痛烈な批判を聞かされている。音楽の欺瞞が入り込んでいる今日、様々な意見を聞く。音楽に関する意見は、家庭において、教会において、機関において、世代の違いでまちまちである。

教会音楽は、良くはならない状態である。ある人は、音楽の原則に固く立つことは、「水漏れのボートで滝つぼに落ちないように、スプーンで上流に懸命に漕いでいるようなものである」と言った。最もひどいことに SDA 音楽の標準は何年も棚上げしておいて、信徒を暗黒と混乱に放っておいたことである。だから、教会はサタンの音楽戦略を知らないままにされている。

セブンスデー・アドベンチストのマインド(心)は操られている。サタンの音楽を通して、神のご品性が誤り伝えられている。このようにしてサタンは、神の民から礼拝を獲得しようと狙って最終的な試みをしかけているのだろうか。悪魔の力は、反逆をしたときより百倍も大きいと言われている(3T328 参照)。彼は時がすばやく過ぎ去ってしまうので、必死の戦いに入っている。サタンの怒りはさらに激しくなり、その方法はさらに巧妙になり、その攻撃の数は増えている。アドベンチスト青年

たちよ、あなたがたはどうするか？

SDA 教会こそ、預言された神の真の残りの運動である。

神はご自分の教会の見張り人を召しておられる。教会の中で危険を察知したすべての忠実な者たちはどんなに不評であっても、神の民を守るために必要な警告のメッセージを伝えなければならない。教会員である限り、すべての信徒は教会に対して責任がある。危険がやってきたときに、警告を発しなければならない。

「あなたがたはシオンでラッパを吹け。わが聖なる山で警報を吹きならせ。・・・主の日が来るからである。それは近い」(ヨエル 2:1)。「大いに呼ばわって声を惜しむな。あなたの声をラッパのようにあげ、わが民にそのとがを告げ、ヤコブの家にその罪を告げ示せ」(イザヤ 58:1)。今こそ、神の民を救うために何かしなければならぬときである。色をぼやかしている時ではない。中立の立場をとっているときではない。

「もし、神がある罪を他の罪より嫌われるものがあるとすれば、—その点において神の民は罪ありとされているが—それは危機のときに何もしないことである。宗教的危機にありながら、その事に無関心で、中立の立場を取ろうとする者は、神のみ前で嘆かわしい罪を犯しているのであり、神に対する最悪の敵意を持っている者と見なされる」(3T281)。

B. 神の民を欺くサタンの音楽

聖書の歴史の中にも、アドベンチストの歴史の中にも、衝撃的な音楽の出来事を見ることができる。

「今日起こっている厳粛な出来事は、歴史の鎖の中の一つである。その最初の鎖はエデンとつながっている」(7BC985)。

ルシファーを墮落させた最初の罪は、礼拝されたいという欲望であった(エゼキエル 28:17; 生き残る人々 24 参照)。

エデンの園で、

「天使たちは、アダムとエバと一緒に、調和した音楽の聖なる

調べを歌った。彼らの歌声が幸福なエデンから響き渡ってくると、サタンは天父とみ子に捧げられる喜びに満ちた賛美の調べを耳にした。サタンはこれを聞いて、妬みと憎しみと悪意を募らせ、どうしてもアダムとエバに不服従の念をあおって、たちまち神の怒りを彼らの上にもたらし、彼らの賛美の歌を創造主に対する憎しみとのろいに変えてしまわなければならないと、部下の天使たちに語るのだった」（生き残る人々44）。

礼拝は彼の目的を達成するために一番やさしい方法であることを知って、大欺瞞者は神への礼拝音楽の神聖さを破壊することを狙った。悪魔的な熱心さで、サタンは真の神を礼拝することから人の注目をそらすために、自分の音楽を作った（あけぼの下 67,73,74 参照）。エデンで始まった音楽争闘は現実である。今日の私たちが見る教会の悲しく、恐ろしい音楽の状態を十分理解するには、歴史を振り返る必要がある。

C. その1ーシナイ山麓での音楽の背教

古代イスラエルが約束の地に向かって旅した時、エジプトを出てしばらくしてからのものであった。モーセが神から十戒を頂くために山に登っている間、民は金の子牛の周りで歌えや踊れやお祭り騒ぎ、すなわちセレブレーションに陥った。山からモーセと一緒に下ってきたヨシュアはそのセレブレーションに伴う歌を聞いて、「戦いの声」と思った。しかし、モーセは「歌の声」であると言った（出エジプト 32:18 参照）。それはついに不道德へと導くものであった（25 節）。それは教会という共同体の、最初の音楽的背教であった。

この欺瞞的、偶像的音楽は、神の栄えを汚すように民を導くために、サタンだけが作れるものであった。サタンの礼拝に加わった者たちの多くが、死の刑罰を受けることになる（28 節）。ホレブでの彼らの経験は、神の民にとって、そのようなどんちゃん騒ぎを繰り返してはならない永遠の教訓とすべきものであった。

D. その2ーヨルダン川東岸での音楽の背教

紅海を渡って40年後、民がヨルダンを渡って約束の地に入る前に、モーセが最後の教えを与える時が来た（申命記を参照）。ヨルダン川の東にあるバアル・ペオルにイスラエルの民が宿営した。民はエキュメニズム（教会一致運動）によって、強い欲望の畏にかかった。異教国の「音楽と踊り」という世俗の訴えに誘われて、放蕩な偶像礼拝に参加した。飲み食い、踊り、にぎやかなお祭り騒ぎの音楽、官能の耽溺は、肉体的不品行、姦淫ばかりでなく、霊的な姦淫にまで導かれていった。神は不興を示された。この時、幾千幾万の民が減びることとなった（あけぼの下65-68；4SP49参照）。

バアル・ペオルの現代版とは？

さて、再び神の民はカナン境界に安住している。今度は天のカナンのことである。バアル・ペオルは現代の教会の写しとなる証拠があるだろうか？ 証拠はある。霊的ヨルダンの堤防に安住している私たちは、大いなる叫びの直前にいる。待っている間に、多くの者は私たちの周りの教派の意見や、神々の精神、教理に親しみ、影響されていないだろうか？ 昔のバアル・ペオルでのように、お祭り騒ぎの礼拝に、世俗の教会とエキュメニカル運動に加わるというところまでは、いっていないかもしれない。そのことについては、わが教会の歴史をたどってみるとおのずと分かってくることである。

再臨直前のわが教会の状態

「私たちの前途には、あらゆる力と偽りの不思議とあらゆる欺瞞をもって襲ってくる大争闘の最後が迫っている。サタンは神のご品性を誤って伝え、できるならば選民をも惑わそうとする」（1T746）。

この言葉は、残りの教会における音楽の状態を暗示している。

1844年は調査審判の始まり（大争闘下210参照）

この時にセブンスデー・アドベンチスト教会が生まれる。この時、音楽の分野でどんな意味深いことが起こったであろうか？ 歴史は、この時

代にジャズが誕生したことを記録している。ジャズは性交の俗語で、ルイジアナ州、ニューオリンズの売春街から始まった言葉である。当時の新聞に「この野生的で、俗化させ、不品行に導く新しい音楽の影響によって困惑するアメリカ」と描写されていた（J.Simmons,Songs of the Hang Loose Ethics,pp35-39）。

神の残りの教会がアメリカで始まった頃、悪の音楽家は、真の神を礼拝する聖音楽を破壊する準備をしていたのであった。大いなる叫びを上げる残りの教会の運命に次第に影響を及ぼす種類の音楽を、敵は持ち込もうとしていた。サタンは、人間の心を取り扱うのに何を利用すれば良いか熟知していた（2SM352 参照）。

もしも、心が神と私たちの交わる唯一の媒介であり（2T347 参照）、また心がすべての行動をコントロールするなら（FE456 参照）、必然的に悪魔はまず私たちの心（マインド）をコントロールするための攻撃を仕掛けてくるであろう。もし音楽が人間の行動に影響を与える最も強い刺激であるなら、その目的を達成するために音楽を利用するのは当然であろう。

E. その3－1844年直後の音楽の背教

バアル・ペオルの経験から歴史のページを幾世紀もめくって1844年を見てみよう。その年は、現代の神の教会の幼児期である。古代の金の子牛礼拝がカナンへの旅路の始めに起こったように、1844年に残りの教会が天のカナンへその旅を始めた頃、わが教会の歴史に驚くべきことが起こった。音楽家であるサタンは、彼の最も憎む民を混乱に陥れるために、同じ道具を用いたのである。

E・G・ホワイトは、あちらこちらで起こったお祭り騒ぎの雰囲気、「興奮と騒動の光景」を描写している。この第三番目の音楽の背教を、主のしもべは次のように書いた：

「1844年も過ぎて大失望の後、様々な形の狂信が起こった。…多くの興奮があり、騒音と混乱があった。何の楽器が奏されているか告げる事ができなかった。ある者は…飛び上がったり、

踊ったり、叫んだりした」。神の預言者は非難のメッセージを送った。「わたしは主の名によって、これらの現象は、神に譴責されるべきものであると告げる」(2SM34)。

このような経験は、神の民に永遠の譴責として残るべきではなかったか？シナイでの金の子牛礼拝においても、1844年後の狂信においても、男女が裸になる始末であった(出エジプト 32:25; Maranata234 参照)。再臨運動(後の SDA 教会となる)も、昔のイスラエルと同じように、同じような音楽、踊り、叫びにおぼれるとは、何ということだろう。使われた音楽は、天の巨匠音楽家によるものであったことを忘れない限り、驚くべきことではないのである。

F. その4 - 1900年の音楽の背教

1900年になって、インディアナ・カンファレンスの SDA 教会で信じがたいことが起こった。インディアナのいくつかの教会では、ドラムやさわがしい「大騒音」で「神」を礼拝するというものであった。主のしもべは、このような集会には聖霊でなく「サタンが使いたちがガンガンという騒音、お祭り騒ぎと混ざっている」と言っている。1900年とその同じタイプのお祭り騒ぎのような礼拝が恩恵期間の終了直前に、アドベンチスト教会に持ち込まれることを予告し、強調された。教会内外の状態を見ると、私たちは今、まさにその時代に住んでいることが分かるのである。

騒音で礼拝する

次の預言を注意深く読むなら、驚き、震えおののくはずである。

「あなたが描写しているようなことがインディアナで起こっているが、主はわたしに、恩恵期間終了直前に起こることを示された。あらゆる異様なことが実演されるであろう。ドラム、ダンス音楽と共に、叫び声があるだろう。理性の持ち主の感覚で正しい決定をする事ができないほど混乱してしまうであろう。それが聖霊の働きであると呼ばれるであろう。聖霊は、決

してこのような方法、騒々しさではご自身を現されない。これは純潔で、真実で、人を高め、清める現代の真理を効果のないものにするため、自らの巧妙な方法を隠すためサタンが考案したものである。去った1月に楽器を伴ってなされたような礼拝はしない方がいい。そのようなことが、私たちのキャンプ・ミーティングに持ち込まれるであろうということが示された。この時代の真理は魂を悔い改めさせるのに、このようなことは一切必要としない。騒乱は感覚に衝撃を与え、もし正しく使われたら祝福となるはずの音楽を歪めてしまう。サタンの使いの力が浮かれ騒ぎと結ばれる。これが聖霊の働きと呼ばれている」(2SM36)。

これらの経験は今日繰り返されているか？

今日、教会の中で第五のお祭り騒ぎの狂信が見られるだろうか？愛する青年たちよ、そのことが今見られるのである。E・G・ホワイトがインディアナで描写した礼拝が、1980年に現れ始めたのである。1990年になると急増している。彼らは自らをセブンスデー・アドベンチスト、セレブレーション教会と呼んでいるのである。

世界的な広がり

1900年にはインディアナ・カンファレンス、一つだけに限られていたが、1990年には幾百のアドベンチストの集まりがセレブレーション風に持たれるようになった。アメリカ、ヨーロッパ、カナダばかりでなく、その他の大陸でもそうである。教会の報告によると、それは世界的な現象になりつつあるという。私たちアドベンチストは、そのことを不思議に思っているだろうか？

聖書の警告

聖書も証の書も、これらの背教について警告している。終わりの時について「また多くのにせ預言者が起って、多くの人を惑わすであろう。また不法がはびこるので、多くの人々の愛が冷えるであろう」と。(マタイ 24:11,12)。使徒パウロは次のように警告している。「しかし、御霊

は明らかに告げて言う。後の時になると、ある人々は、惑わす霊と悪霊の教とに氣をとられて、信仰から離れ去るであろう。それは、良心に焼き印をおされている偽り者の偽善のしわざである」(I テモテ 4:1,2)。

預言の霊の警告

私たちは、預言の霊があることを感謝しているだろうか。神の警告ははっきりしている。1900年に起こった狂信に似た背教の例が与えられ、それを察知し、拒む事ができる。神は、残りの教会にセレブレーションの狂信が起こることを前もって警告されないでは、そのことが起こるのを許されないであろう。「まことに主なる神はそのしもべである預言者にその隠れた事を示さないでは、何事をもなされない」(アモス 3:7;4T 179 参照)。

音楽の背教に対する神の不興

過去の四つの背教に対して、明らかに神の不興が表された。四つともサタンの靈感によるものであった。忘れてはならない。第五の似たような背教も悪魔の靈感による(2SM36 参照)。サタンの音楽の欺瞞は決して変わっていない。終わりに近づけば近づくほど、ますます猛烈になっていくのである。これらのはっきりした警告を与えられながら、アドベンチストの民が欺かれることがあろうか。神の民を破滅に陥れる種々のプログラム、戦略を察知できたら、欺かれる必要はない。

今日のセレブレーションは、新しいものではないのである。墮落した音楽家によって考案されたものであり、古代イスラエルから始まって成功してきた。歴史を注意深く見ることによって、現代を知るのである。

G. その5－恩恵期間終了直前の音楽の背教

これはすべての音楽背教の最後である。その後続く音楽の背教はない。セレブレーション運動は、神の真のグローバル伝道を挫折させるサタンの終曲なのである(大争闘下 190 参照)。この礼拝を活気づけようとする運動は、全教会をローマに引き戻し、SDA を獣の刻印に備えさせるものである(5T216 参照)。それは「恩恵期間が終了する直前に起こる」のである(2SM36)。

この事が成就すると、SDAの恩恵期間が先に終了する。誰にもだまされてはいけない。その前に、彼らは率直な証しに反対するために立ち上がるであろう（初代文集 438 参照）。

後の雨—大いなる叫びの時は、SDAにとって、恩恵期間終了の時である（9T97 参照）。今、準備を怠る者は、悩みの中では準備はできない。彼らの運命はもう定まっているのであって、その時にはもう見込みがない（大争闘下 393,394 参照）。これは何も新しい教えではない。聖書と同じほど古い教えである。ただそれは寝かされていたのであり、掘り出せばいいのである。

用いられるセブンスデー・アドベンチスト

聖書は、神の裁きは神の民から始まると言っている（1ペテロ 4:17 参照）。エゼキエルは、裁きはエルサレム、すなわち教会から始まる（エゼキエル 9:4 参照）と言った。セブンスデー・アドベンチストから裁きが始まることを聖書は教えている。主のしもべは次のように言っている：

「最終的な贖罪と調査審判の大いなる日に、審査されるのは、神の民と称する人々だけである。悪人の審判は、これとは全く別の働きで、もっとあとで行われる。『さばきが神の家から始められる時が来た...』」（大争闘下 211）。

もし、SDAが大いなる叫びをするならば、私たちの最終期限と世の最終期限とは異なるはずである。SDAの運命が決定されていたとしても、世の人々の伝道はまだ完成していない（黙示録 18:1-4；マタイ 24:14；大争闘下 92 参照）。1900年の預言の成就を見ると、まさに私たちは「恩恵期間の終了直前」に住んでいる。

驚くべき警告

1900年の音楽の背教より更に恐るべき警告が、次のように表されている：

「恩恵期間の終わりに関係のあるできごとと、悩みの時のため

に備える働きとが、はっきり示されている。しかし、多くの人々は、全然啓示を受けなかったように、これらの重要な真理を理解していない。サタンは、彼らに救いに至る知恵を与えるような感化をことごとく奪い去ろうとかがっているのです。彼らは悩みの時に備えができていない」（大争闘下 359,360）。

ノアの時のように、多くの者はそれらの出来事を理解しないし、何の注意も払おうとしない（5T50 参照）。しかし、神は後の雨に備えて「純潔で、真実で清い伝道者をお持ちになるであろう（手紙 55、1886 年）。福音宣伝を終わるために神御自ら人々を備えられるということは、慰めである。何と光栄ある働きが神の民を待っていることだろう。全力を尽くして最後の働きに加わりたいものである（7BC970 参照）。私はその仲間に加わりたい。あなたはどうか。



歌唱に関する証の書からの引用文

(編集者の追加付録)



1. 教育 197-198 歌の不思議な力 真理を印象づける

聖書に記録されている歌の歴史は、歌や音楽がどんなに有用であり、また有益であるかということを示している。音楽はしばしば悪用されて悪い目的に使用され、したがって人の心を誘惑する上に最も力のあるものとなっている。しかし、音楽が正しく用いられるならば、それは神のとうとい賜物となる。音楽が人の思いを高貴なテーマに高め、魂に靈感を与え、これを向上させるようにと、神は意図されるのである。

イスラエルの国民が荒野の旅にあって、聖歌の歌声によって道中を励まされたように、今日も、神はご自分の民が人生の旅を楽しくするように命じておられる。神のみ言葉を記憶するには、それを歌にして繰り返すことが何よりも効果的な方法である。このような歌は、不思議な力を持っている。それは、粗野で無教養な性質を和らげる力を持ち、また人の思いを活気付け、同情心を目覚めさせる力を持ち、行動の一致を促し、勇気を失わせたり努力を弱めたりするような暗い思いや胸さわぎなどを払いのける力を持っている。

歌は霊的な真理を心に印象づけるのに、最も効果的な方法の一つである。押しつぶされて絶望しかかっている魂が長い間忘れていた子ども時代の歌の文句を聞いて、ふと神のみ言葉を思い出し、そのために誘惑が力を失い、人生に新しい意義と新しい目的が生まれ、勇気と喜びを他人にも分け与えるようになった例がどんなに多いことであろう。

2. 青年への使命 290 音楽は礼拝行為

宗教的な行事の一部として、歌を歌うことは、祈りをささげることと同じに礼拝の行為である。事実多くの歌は祈りである。この事を認めるように子どもに教えるときその子どもは、自分が歌う言葉の意味をもつ

と深く考え、その言葉の持つ力にもっと心を動かされるのである。

3. あけぼの下 256-257 音楽の効力—善にも悪にも

音楽は聖なる目的のために用いられ、清く、気高く、高尚なことに人の思想を高め魂のうちに、神への献身と感謝の念を起こさせた。こうした古代の習慣と、現在音楽がしばしば用いられている方法との間には、なんと大きな相違があることであらう。神に栄光が帰されるためにこの賜物を用いる代わりに、自己を高めるためにこの賜物を用いる者がなんと多いことであらう。不注意な者は、音楽を愛好する心から、世俗愛好者と一諸になって、神が神の子らに行くことを禁じられた快樂の集会に行くようになる。こうして、正しく用いられるならば、大きな祝福であるものが、義務と永遠のことがらを瞑想することから人の心をそらすサタンの最も有効な道具となる。

音楽は、天の宮廷の神の礼拝の一部になっている。であるから、できるかぎり天の合唱隊と調和した声で、賛美の歌を歌うように努力しなければならぬ。声の正しい訓練は、教育の重要な一面であって怠ってはならないことである。歌は、祈りが礼拝の行為であるのと同様に、宗教的礼拝の一部である。歌を正しく表現しようとするには、歌の精神をよく心に感じなければならぬ。

4. 各時代の希望上 67 イエスと賛美

たびたびイエスは詩篇や天の歌を歌って心の喜びを表明された。ナザレの住民たちはイエスが神への賛美と感謝をささげられる声をたびたび聞いた。イエスは歌を通して天とまじわられた。仲間の者たちは、働きに疲れて不平を言うと、イエスの口から出る美しい歌の調べに元気づけられるのだった。イエスの賛美は悪天使たちを追い払い、香煙のようにその場をかおりで満たすように思われた。聞いている者たちの心は、この地上の放浪から天の家郷へとほこばれていった。

5. ミニストリー・オブ・ヒーリング 30 イエスと賛美

キリストは...早朝どこか人のいない所で、瞑想したり、聖書をしらべ

たり、あるいは祈りをしておられることがよくあった。また歌いながら、朝の光を迎え、感謝の歌で働く時間を愉快地にし、働きに疲れた人や、失望した人に天来の喜びをお与えになった。

6. アドベンチスト・ホーム 506 キリストの方法

他人が自己をおさえることができずに、短気でいらいらして不平を言っているときには、何かシオンの歌を歌い始めなさい。キリストが大工の仕事場でお働きになっていた間に、他の人間は時折主を取り囲んで、いらいらさせようと試みた。しかし主はある美しい詩篇の歌をうたい始められたので、彼らは知らず知らずいっしょに唱和した。それはいわば、そこに臨在する聖霊の力に感化されたのであった。

7. EV506 声 救霊の力

人間の声にはすぐれた感動と音楽性があるので、もし学ぶ者が熱心に努力をするならば、その人は魂をキリストへと勝ち取る力となる話しぶりや歌い方の習慣を身につけることができる。

8. 青年への使命 294 善の力 美しさと感動と力

音楽は善のために大きな力となり得るが、私たちは礼拝のこの部門を十分に利用していない。歌うことはたいてい気分次第やまた特別な場合に限られている。またあるときは人々がしどろもどろに歌うのをそのままにしておくために、出席している人々の心に音楽が有力な効果を及ぼす事ができない。音楽には美しさと感動と力がなければならない。声をあげて賛美の歌と献身の歌をささげなさい。もしできるなら楽器を用いて、美しい調べを神のお喜びになるささげものとして神のみもとへ上らせよう。

9. EV506 声による讚美は楽器よりも神を喜ばせる

神の音楽を喜びと感謝に満ちた心で歌う人の声は、かつて人の手によってつくられた楽器すべてがかなでる音楽よりも神を喜ばせるのである。

10. 教育 196 再臨信徒の希望と信頼の歌

地上の最後の大きいなる危機の影が深まっていくときに、神の光は明るく輝き、希望と信頼の歌は最もはっきりと、そして最も高らかな調べとなって聞かれるであろう。

11. ミニストリー・オブ・ヒーリング 232 失望のときの武器

歌は失望するときいつでも用いることのできる武器である。救い主より出る光に心をうち開くとき、健康と祝福を受ける。

12. ミニストリー・オブ・ヒーリング 254 試練に会うとき

歌をもって神をほめ、感謝をささげなさい。試練にあうとき自分の気分を口に出さないで、信仰によって神に感謝の歌をささげるべきである。

13. 青年への使命 290 歌は人を近づかせ、親しみを増す

教育の一つの手段として歌の価値を見落してはならない。家庭で美しい純潔な歌がうたわれるときに、人をとがめだてる言葉が少なくなり、快活さと希望とよるこびのことばが多くなる。学校で歌を歌おう。そのとき、生徒たちは神と教師にますます近づき、また互に親しみを加えるのである。

14. キリストの実物教訓 309-311 声の訓練

話すという能力は、つとめて修得しなければならないタラントである。わたしたちが神から受けたあらゆるたまものの中で、これほど大きな祝福をもたらす能力は、ほかにない。わたしたちは、声を使って、人を説得したり、信服させたり、神に祈ったり、賛美したりする。また、声を用いて、あがない主の愛について、人びとに語るのである。であるから、声を最も効果的に善のために用いるよう訓練することが、非常にたいせつである。

声の修練と声の正しい使い方は、知的でクリスチャン活動に従事している人びとでさえ、非常になおざりにしている。物を読んだり、話したりするとき、低すぎたり、早すぎたりして、何を言っているのかよく

わからないことが多い。また、重苦しく、不明りょうな発音をする人がいる。かん高い、するどい調子で聴衆に不快感を与える人もある。聖句、賛美歌、報告、発表などを公衆の前でする場合に、何を読んでいるのかわかりにくく、せつかくの力も印象深さも失われてしまうことが、よくある。

このような欠点は、正すことができるものであるから、ぜひとも直さなければならない。…熱心に努力することによって、だれでも、よくわかるように読み、音量のあるはっきりした丸い声で印象深く語ることができる。こうすることによって、わたしたちは、キリストのために働く者として大いに効果をあげることができる。

すべてのクリスチャンは、キリストの無尽蔵の富を他の人びとにのべ伝えるために召されたのである。であるから、わたしたちのことばを完全にするように努めなければならない。聞く人の心を引きつけるような方法で神のことばを語らなければならない。神は、人間という通路がつたないものであることを望まれない。天からの流れが、人間を通していくときにその人のために、それが軽んぜられたり、価値が低められたりすることは、神のみ旨ではない。

15. EV504,505 声の訓練の重要性

真の礼拝の深い至福を適当に述べるのできる言葉はない。人が霊と理解をもって歌うとき、天の音楽家たちはその調べをとりあげて感謝の歌に加わる。私たちが神と共に働く者となることを可能にするあらゆるたまものを私たちに授けられたお方は、彼の僕たちがその声を培って、すべての人々が理解できるように話し、歌えるようになることを期待しておられる。必要なのは大声で歌うことではなく、明瞭な抑揚、正しい発音、はっきりとした語調である。神への賛美が耳ざわりなざらざらした、またかん高いものでなく、はっきりとやわらかな調子で歌われるように、すべての者が時間をとり、声を磨こう。歌う能力は神のたまものである。それが神のみ栄えのために用いられるようにしよう。

16. 青年への使命 291 天のハーモニーに近づく

音楽は天の宮廷における神の礼拝の一部分である。であるから、賛美の歌をうたうときには、できるだけ天の合唱隊のハーモニーに近づくように努めなければならない。声の正しい訓練は、教育における重要な一部分で、これをなおざりにしてはならない。

17. EV507 調和

音楽は天の宮廷では、神の礼拝の一部をなしている。私たちは、私たちの讚美の歌ができるだけ天のコーラスの調和に近づくように努めるべきである。

18. EV504 声を磨く、伝道の働きのために

今日一般的に示されているより、声を磨くことにもっと関心が向けられるべきである。美しい調べではっきりと福音の歌を歌うことを学んだ学生たちは歌による伝道で多くの良い働きができる。罪と悲しみと苦悩のために暗い中にとり残されている人々の中へ、メロディーと明るい光をたずさえて行ったり、また教会へ出席する特権に恵まれない人々のために、神がお与えになった才能を使う数多くの機会が見い出せるであろう。

19. 教育 235 ①正しい姿勢 ②呼吸 ③発声

まず第一に心がけなければならないことは、立ったときとすわったときの正しい姿勢である。神は人間をまっすぐにおつくりになった。神は我々が肉体的な恵みばかりでなく、また知的靈的な恵みすなわち美德、気品、落ち着き、勇気、独立心を持つように望まれるが、そうした美德を養うには、まっすぐな姿勢が大いに役立つのである。教師は、この点について言葉と模範を通して教えを与えるべきである。正しい姿勢とはどういうものかを示し、いつもその姿勢を保つように主張しなければならない。

正しい姿勢について大切なのは呼吸と音声の訓練である。まっすぐに立ったりすわったりしている人は、そうでない人よりも正しい呼吸をす

る傾向がある。しかし教師は、深く呼吸することの大切さを生徒たちに印象づけなければならない。呼吸器官の健康な活動は血液の循環を助け、全体の組織を活気づけ、食欲を刺激し、消化を促進し、深い早い睡眠を与え、こうして身体をさわやかにするだけでなく、精神を和らげ落ち着かせるということを教えなければならない。深呼吸の大切さを示すと同時に、またその実行を奨励しなければならない。深呼吸を促進する練習をさせ、その習慣が築かれたかどうかを確かめなければならない。

発声の訓練は、肺臓を広げてこれを強くし、病気を防ぐのに役立つので、体育上重要な位置を占めている。読んだり話したりするとき確実に正しく発声するには、呼吸にともなって腹部の筋肉が十分に運動するように、また呼吸器官が圧迫されないように気をつけなければならない。のどに力を入れないで、腹部の筋肉に力を入れなければならない。こうすることによって、のどや肺臓がひどく疲れたり、またひどい病気になったりするのを防ぐ事ができる。めいりょうな発音、抑揚のあるなめらかな声の調子、あまり早すぎない話しぶりができるように細心の注意を払わなければならない。これは健康を増進するばかりでなく、生徒の課業に快い気持ちと能率とを増し加える。

これらのことを教える際にコルセットで身体を締めつけることや、内臓活動を圧迫するその他のいろいろな習慣がどんなに愚かな悪い習慣であるかを示す絶好の機会が与えられる。不健康な服装の様式から、つぎつぎに尽きることなく病気が起こるので、この点について綿密に教えなければならない。腹部を圧迫したり、身体のだこかの器官を締めつけるような衣服の着方は危険であるという観念を生徒に植えつけなければならない。衣服は、十分に呼吸ができて、らくに両手を頭から上へ持ち上げられるものを作るべきである。肺臓を締めつけると、その発達が妨げられるばかりでなく、血液の循環と消化が妨げられ、ついには体の全体が弱くなる。すべてこのような習慣は、体力と知力を低下させ、生徒の発達を害し、その成功を妨げる場合が多い。

20. My Life Today 33 讚美と音楽の礼拝

魂は讚美の翼にのって天の近くへと上っていくであろう。神は天の宮廷において、讚美と音楽をもって礼拝されており、私たちが自分たちの喜びを表わすとき天の主の礼拝に近づくのである。誰が神の栄光に讚美をささげるであろうか。敬虔な喜びをもって私たちの創造主のみ前に行き、感謝と美しい調べの声をあげよう。

21. 大争闘上 123 殉教者フスとヒエロニムスの讚美

ヨハン・フスは、天を仰いで、『おお、主イエスよ、わたしは、わたしの魂をみ手にゆだねます。あなたはわたしを贖ってくださったからです』と言った。

こうして彼は、俗権の手に渡され、刑場へと引かれていった。彼の後には、数百名の軍人たち、美衣をまとった司祭や司教たち、コンスタンツの住民などの大行列が続いた。彼が火刑柱に縛られ、火をつける準備が整ったときに、殉教者は、もう一度、誤りを捨てて死を免れるよう勧告された。しかしフスは言った。「いったいどんな誤りを取り消せと言うのか。わたしは、何も悪いことはしていない。わたしが書き説教したことすべては、人々を罪と滅びから救うためのものだったことは、神があかしをしてくださる。したがって、わたしが書き説教した真理をわたしの血をもって確証することは、わたしの最も喜びとするところである。」

彼の回りに火が点じられたとき、彼は、「ダビデの子、イエスよ、わたしをあわれんでください」と歌い出した。そしてそれは、彼の声が永久に沈黙するまで続いた。

彼の敵たちでさえ、彼の英雄的な態度に強く心を打たれた。ある熱心な法王教徒は、フスと、その後しばらくして死んだヒエロニムスとの殉教を描写して言った。「ふたりとも、最後の時が近づいたとき、忠実に耐えぬいた。彼らは、婚宴に行くかのように火刑にのぞんだ。彼らは苦しみの声をあげなかった。炎が上ったときに、彼らは讚美歌を歌い出した。激しい炎も彼らの歌を止めることができなかった。」

フスの体が燃えつきたとき、彼の灰は、その下の土とともに集められて、ライン川に投げ捨てられた。こうして、それは、大海へと運ばれていった。迫害者たちは彼が宣べ伝えた真理を根絶したものと考えたが、そうではなかった。その日大海に運び去られた灰が、地のすべての国々にまかれた種のようになること、また、まだ未知の国々において、それは多くの実を結び、真理のあかしを立てるようになることに、彼らは考え及ばなかった。

22. EV508 歌い方

私はすべての人が霊をもってまたよく理解した上で歌うべきであるということを見せられた。神はわけのわからない言葉や不調和な音を喜ばれない。間違いより正しさの方が、常に神をお喜ばせするのである。そして神の民が正しい調和ある歌い方に近づけば近づくほど、神はもっと栄光を受けられ、教会はもっと祝福され、不信者の人々ももっとよい影響を受けるようになるのである。

23. 5T493 心から 厳肅さと畏敬の念

多くの者の心からあふれ出る澄んだ明確な発声の歌の調べは、魂を救う働きのために神がもっておられる手段の一つである。すべての奉仕は、あたかも集会の主である神の御臨在を目に見ているように厳肅さと畏敬の念をもってとり行われなければならない。

24. EV510 良い歌い方、悪い歌い方

ある者は、より大きな声を上げるほど音楽的だと考えていますが、雑音は音楽ではありません。良い歌い方は小鳥たちの音楽のようなもので、感情を静めるようなメロディーに富んでいます。いくつかの教会で聞いた独唱は、まったく主の家の礼拝の奉仕にふさわしくありませんでした。長く引き伸ばした音や、オペラ的な歌に良く見られる独特な音は天使たちに喜ばれません。天使たちは自然な調子で歌われる賛美の単純な歌声を喜びます。はっきり発声される一つ一つの言葉が音楽的な調子で歌われる歌声に、天使たちは声を合わせて参加します。彼らは霊に満たされ

た心からの、そしてよく理解した歌い方がされるとき、心をこめて熱心に共に歌うのです。

25. 青年への使命 292 霊と悟りをもって

人間が霊と悟りをもって歌うときに、天の音楽家たちは調べを奏でて感謝の歌にあわせるのである。

26. 2T144 騒々しい楽器の音

この時代の青年のほとんどは、永遠の生命を受けるにふさわしくないと考えるだけでも耐えがたい。ああ、あの楽器の音が止んで尊い時間を自分たちの好き勝手な楽しみにこれ以上費やさないことを願うものである。

27. EV507 できるだけ全会集の参加 賛美歌礼拝

歌がいつも少数の人々でささげられるのではなく、全会衆が出来るだけ度々加わるようにしよう。少数の人々だけが歌うべきではなく、全出席者が賛美歌礼拝に加わるよう励ますべきである。

28. EV506 最も良い歌手たちがリードする

会衆を導くことができる最も良い歌手で隊を組織し、そして望む者は彼らに合わせるようにさせなさい。

29. 9T144 賛美歌礼拝

集会を催すときには、賛美歌礼拝を行うために何人かを選ぶようにしよう。歌の伴奏には楽器を上手に弾こう。私たちの働きで、楽器の使用に反対すべきではない。しかしこの分野では、注意深く行われるべきである。なぜならそれは歌による神への賛美だからである。

30. EV509 単純 世の音楽家

できる限り世の音楽家を避けるべきである。霊と理解をもって歌う者たちを集めなさい。.....

集会で歌手がその奉仕を提供することがある時、それを受け入れるべ

きである。しかし、歌手を雇うためにお金を費やすべきではない。しばしば、コワイヤーが、どんなに熟練しようとして、会衆によって歌われる単純な歌の方が魅力がある。

31. EV510 見せびらかし？

見せびらかしは宗教でもなければ、聖化でもない。楽器奏者が献身しておらず、主に心からの賛美をしない、見せびらかしの演奏ほど神にとって不快なものはない。

32. EV511 形式

形式と儀式は、神の国を構成しない。

33. EV512 単純さ

クリスチャンと称する者たちが、彼らの特権である高い理想に到達するとき、彼らの礼拝ではキリストの単純さが維持されるであろう。形式と儀式と音楽の偉業は教会の力ではない。

34. EV 498 神の栄光のためか、音楽の乱用

歌唱における人の声は、神の栄光のために用いられるべきものとして託された才能である。義の敵は、この才能を自分の働きのために大いに利用する。人々の祝福となるべきこの神のたまものをサタンは乱用させ、間違った適用のしかたをさせて、彼の目的のために奉仕させている。この声の才能は、神の大目的の働きにささげられるときに祝福となる。

35. EV500,501 歌と楽器

歌唱の才能を主の働きに用いよう。楽器の使用に決して反対しているわけではない。これらは古代の宗教の儀式で使われた。礼拝者たちが立琴やシンバルで神をたたえたように、礼拝の中で音楽の占める場所があるべきである。それは関心を増すのである。

36. 2SM242,243 歌いながら光に歩め

重圧と悲しみを感じて絶望しているときでさえも、心のうちに神にさ

さげる美しい調べをつくり、歌いながら光に沿って歩きなさい。知っている者のひとりとして私は言うのであるが、やがて光がさしてきて喜びが私たちのものとなり、霧や雲は巻き去られてしまう。私たちは陰と暗黒の重苦しい力から、神が臨在なさる澄んだ光の中へと移っていくのである。

37. キリストへの道 113 贖罪問題は永遠の科学、歌

さて、贖罪問題は、天使たちも研究したいと望んでいるもので、それは永遠にわたってあがなわれた者の科学であり歌であります。ですから贖罪の問題は今でも熱心に研究する価値があるのではないのでしょうか。

38. 大争闘下 433,434 十字架は永遠の科学、歌

キリストの十字架は、永遠にわたって、贖われた者たちの科学となり歌となる。栄光につつまれたキリストのうちに、彼らは、十字架につけられたキリストを見る。広大な空間に、数えきれないほどの諸世界を、その力によって創造し、支えておられるおかた、神の愛するみ子、天の大君、ケルビムや輝くセラピムが喜んであがめるおかた、そのおかたが、墮落した人類を救うために身を卑しくされたことは、決して忘れられることがない。また彼が、罪の苦痛と恥とを負われ、天父からはそのみ顔を隠されて、ついには失われた世界の苦悩がその心臓を破裂させて、カルバリーの十字架上でその命を絶たれたことは、決して忘れられることがない。諸世界の創造者、すべての運命の決定者が、人類に対する愛から、ご自分の栄光を捨てて、ご自分を卑しくされたことは、いつまでも宇宙の驚嘆と称賛の的となる。救われた諸国民が、贖い主を見て、そのみ顔に天父の永遠の栄光が輝いているのをながめるとき、また、永遠から永遠にいたるイエスのみ座をながめ、イエスのみ国には終わりが無いことを知るとき、彼らはどっと歓喜の歌声をあげて、「ほふられた小羊、ご自身の尊い血によって、わたしたちを神に贖って下さったおかたは、賛美を受けるにふさわしい、賛美を受けるにふさわしい」と叫ぶのである。

音楽の悪用

39. 2SM 37,38 サタンの罠

去った1月わたしの見せられた混乱させる様々な騒音には聖霊はいっさいかかわらない。音楽は、正しく用いられるなら神を賛美し神の栄えとなる。しかし、このような騒々しい音楽を通してサタンは働くのである。彼はそれを蛇の毒針のように用いるのである。過去にあったこれらのことは将来にもあるであろう。サタンはそのようなやり方で音楽を罠として用いるであろう。

40. CT 339/アドベンチスト・ホーム 592 天使を泣かせる歌

しかし、これとは違った種類の親睦会がある。そこでは外観の誇りや、ばか騒ぎや、ふまじめさが見られる。そこにつどう人々は、娯楽を求めて神を忘れる危険があり、そこで行われていることは見守っている天使たちを泣かせている。その間中、快楽の場面が人々のパラダイスとなる。だれもかれもわれを忘れてばか騒ぎをし、浮かれ楽しむ。目は輝き、ほおは赤らむが良心は眠っているのである。私たちの団体や教会にとって不名誉となるような、娯楽のための集まりをする社交階級の人があった。彼らは着物や容貌を自慢し、自己満足や浮かれ騒ぎやばかげたことを進んでやっている。サタンは賓客として招かれており、これらの集会を後援する人々をとりこにするのである。

そのような仲間の集まりの一光景が私の前に示された。そこでは、真理を信ずると称している人々が集まっていた。ひとりの人が楽器のそばにすわっており、見守っている天使たちを悲しんで泣かせるような歌が聞こえていた。そこには陽気な気分や粗野な笑い声が満ちており、熱狂的で一種のインスピレーションがみなぎっていた。しかしそれはサタンだけが作り出すことのできるような喜びであった。これは神を愛する人のすべてが恥じるような、熱狂的で夢中になっている雰囲気だった。それは汚れた思想と行動に対する協同者をつくり出すものである。そのような光景の仲間にはいついた人のある者は、心からこの恥ずべき行動を後悔していたにちがいないと考えられる十分な理由がある。

41. 青年への使命 292-294/1T506 音楽の悪用

あそこの住居のあたりには天使たちが舞っています。ところがそこには青年たちが集まっていて、彼らの歌う声や楽器の音がきこえてきます。集まっている人たちはクリスチャンですが、そこからきこえてくるものは一体なんでしょうか。それはダンスホール向きの歌、くだらない歌です。ごらんなさい。純潔な天使たちは光をおさめ、暗黒がその住居にいる人たちを包みます。天使たちはその場から去って行きます。彼らの顔には悲しみの影がさしています。ごらんなさい、彼らは泣いているのです。私は安息日を守る人々の間に、ことに〇〇においてこうしたことを何度も何度もみました。

祈りにささげられるべき時間が音楽に占領されています。安息日を守るクリスチャンたることを自称する多くの人々が音楽を偶像として礼拝しています。サタンは音楽を通して若い人たちの魂にはいりこむことができますなら、あえて音楽に反対しません。

人々の心を神からひきはなし、神の奉仕にささげられるべき時間を費してしまうようなものなら、なんでもサタンの目的にかなうのです。彼らはできるだけ多くの人々を享樂的なことにおぼれさせておくために最も大きな影響をおよぼすような手段で働き、一方、人々はそのサタンの力に麻痺させられています。

音楽は、よいことのために用いられるときに祝福となりますが、しかしサタンによって魂を迷わせるための最も魅力的な手段とされることが多いのです。音楽が悪用されると、それは神に献身していない人々を誇りと虚榮と愚かさに陥らせます。音楽が献身と祈りに入れ代るようになると、それはおそるべき災となります。若い人たちがよく歌うために集まりますが、クリスチャンたることを自称している人でさえ、くだらない会話や音楽の選択によって、神と信仰をはずかしめています。聖樂は彼らの趣味にあわないのです。わたしはこれまで人々の注意をひかないで見過ごされていた神のみことばの率直な教えをさし示されましたが、これに注意しない人々は、審判の時に、すべてこれらの靈感のことばによって罪を定められます。

42. VSS423-425 神に喜ばれない歌い方

歌うことは、宗教的礼拝において話すことと同様に、神への礼拝である。しかし、奇異な、あるいは風変わりな事が人々の注意を引き、聖なる音楽の結果となるべき真実で神聖な印象を壊してしまっている。歌において、奇妙で一風変わった事は何でも、それは宗教的奉仕の重大さと神聖さを減じることになる。

体を動かすことはほとんど益にならない。どのような場合であれ、宗教的礼拝と関係する全てのことは威厳あり、かつ神聖で深い感銘を与えるものであるべきである。キリストの代表者だと公言する牧師たちが、演技する姿勢に自らの体を投じ、威厳のない下品なしぐさをし、洗練されてないお粗末な身振りをしてキリストを誤り伝える時、神はお喜びにならない。これらすべての行為は、奇異で風変わりで刺激的なことを求める人々の好奇心を掻き立て、楽しませる。しかしこれらは、目撃している人々の心と意思とを高めるものではない。

全く同じことが歌い方にも言える。あなたは威厳のない態度をとっており、あなたは力いっぱい大きな声を張り上げて歌う。あなたは、すばらしい旋律や声音を、あなた自身でかき消してしまっている。体の動きや耳障りな騒がしい声は、この地上そして天で聴いている人々に対して、美しい調べとはならない。このような歌い方には欠陥があり、完全でやわらかい甘美な音楽の調べとして、神に受け入れられるものではない。我々の集会でときどき見られるこのようなショーは、天使たちの間ではけっして行われぬものである。このような耳障りな音や身振りは、天使たちのコワイヤーでは見られない。彼らの歌い方は耳障りなものではない。それはわたしが目撃したような大げさな力みはなくやわらかく美しい旋律である。それは力を絞って無理して体を動かすようなものではない。(VSS=The Voice in Speech and Song)

S兄弟は、どれほどの人が混乱しうんざりさせられているかを知らない。ある者は歌に下品な動作が加わるのを見て、神聖でない軽率な思いを抑えることができない。S兄弟は自己表示をしている。彼の歌い方は、心をやわらげ感情に触れる感化力をもっていない。多くの者が集会に出席して、講壇から語られる真理の言葉に耳を傾けた。それは彼らの心に触れ、厳粛な思いを持たせる。しかし多くの場合、与えられた印象を深めないような歌い方がなされている。誇示すること、体をねじること、わざとらしい様子(みかけ)、不自然なやり方は神の家ではおかしく不適當であり、それによって厳粛な印象が取り除かれている。

彼(S兄弟)は、歌うことがこの世においてなすべき最も偉大なことであり、自分はその非常に尊大でもったいぶった方法を持っていると考えてきた。あなたの歌い方は、天使のコワイヤーを喜ばせるものとはかけ離れている。天使の音楽隊のそばに立ち、肩を持ち上げ、言葉を強調し、体を動かし、声を張り上げている自分の姿を想像してみなさい。天使たちの前でいったいどんなコンサート、ハーモニーになることであろう？...

教会において、あなたの声はとても大きく耳障りであり、まるで優雅とはいえない身振りにあしらわれている。やわらかく銀鈴を振るような旋律や、天使の音楽のような音は聴くことができない。あなたは神にではなく、人に対して歌っている。.....

あなたは全会集よりも大きな声を振り絞りながら、興奮し賞賛の思いをめぐらせている。あなたは実に、自分の歌い方を非常に高く評価し、この賜物を用いているのだから報酬を得るべきだという考えを抱いてきた。

音楽家のための十戒

ベティー・ブランド

1. あなたは、音楽を神としてはならない。
2. あなたは、自分がなにか偉い者であるかのようなイメージを心に作ってはならない。専門家気質という祭壇を築いて、それにひれ伏してはならない。また、「クラシック」だからといってすべての曲をやたらに演奏することによって「古きマスター」(楽聖=大音楽家)に盲目的に仕えてはならない。
3. あなたは、神聖なことに関する音楽にはそれにふさわしい歌い方、演奏をすべきである。
4. あなたは、練習を忠実に、勤勉にして、演奏の時には、神が祝福してくださることを確信して安んじなさい。
5. あなたは、音楽の奉仕ができるタレントをもって献身することによって神と救い主を敬いなさい。
6. あなたは、仲間の音楽家をねたんではならない。ねたみには死の種が宿っているからである。
7. あなたは、バビロンの音楽によって誘惑されてはならない。たといそれが巧みに宗教的な装いをしている。
8. あなたは、それがどんなに高貴であろうと、あなたの芸術に祈りの時、聖書研究の時を盗まれてはならない。
9. あなたは、心にもないことを言葉にして歌うことによって偽りの証をたててはならない。
10. あなたは、すばらしい演奏が終わっても、神にのみ属する誉れと栄光をむさぼってはならない。



